筑波大学新聞

第283号
編集責任
筑波大学新聞
編集委員会
委員長　荻野祥三
TEL: 029(853)2040・6699
E-mail shinbun@sakura.cc.tsukuba.ac.jp
月　刊

発行所
筑波大学
茨城県つくば市
天王台1－1－1

総合科目アンケート

授業の満足度さらに高まる

受講者の偏りが課題

総合科目編成委員会（委員長＝金井幸雄教授・生物圏）による、平成21年度第2学期に開設された総合科目の授業評価アンケートがまとめられた。1学期に行われた前回の調査と比較して、全ての調査項目で前回同様か、それ以上に評価されていることが分かり、総合科目の改善努力が示された。一方で、以前から問題とされてきた一部の学群、学類に見られる履修科目の偏りは今回も見られた。

授業評価アンケートは15項目からなる。今学期開講された54科目全てで実施され、アンケート実施日の出席者4877名のうち、4467名が回答した。

アンケート項目のうち、「この授業の内容はよく理解出来た」は79・3％（1学期74・4％）、「授業担当者の話し方に熱意が感じられた」は91・7％（同86・7％）と高い評価が示され、前回からさらに授業内容の満足度が向上していることがわかった。

また、「この授業における教材・資料の提示が理解の促進に効果的であった」の項目では、同アンケートの始まった平成19年度の調査以来最高となる89・1％の肯定的回答を得るなど、各担当教員による授業内容の改善が効果的だったことを裏付ける結果となった。

一方、「この授業の受講者数は適切であった」の項目では、他より肯定的評価の占める割合が低く、60・5％と1学期の調査並みとなった。このことについて同委員会では、受講者数が教室の収容人数内でも、混雑率が高いと不満を持つ学生が多いためではないかと分析している。

科目別では、「頭頸部疾患入門」（医学開設）が満足度をはかる項目で最も高い97・5％の肯定的評価を集めたほか、昨年の同時期に行われた調査で高い評価を得ていた「生と死を考える1－緩和医療と臨床倫理」（医学開設）や「卒業生によるオムニバス講座2009（社会人としてどう生きるか）」（同委員会開設）が今回も満足度が90％を大きく上回る評価を集めた。

課題となっている各学群の履修者比率について、医学群、体育専門学群、生命環境学群、理工学群で偏りが大きく、これらの学群に所属する学生の3割から5割が同学群で開設される授業を履修していた。その他の学群でも、文系学群に所属する学生は理系学群の、理系学群に所属する学生は文系学群の科目の履修を避ける傾向があることが分かっている。

同委員会では「履修ガイダンスを徹底し、事前に授業内容の情報を分かりやすく学生に提供するなどして学生が自らの専門とは異なる分野の科目を受講しやすくしたい」としている。対策の一環として今年度から文系学群の学生向けに開設された、それぞれ物理、地球科学、化学、生物を扱う「現代人のための科学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」（教養教育推進室開設）は、受講者数は少なかったものの、実験などを盛り込んだ授業内容が高い評価を得た。

総合科目の改革案を審議する教養教育推進室（室長＝石川本雄教授・シス情）では、平成23年度以降の新しい総合科目のカリキュラム導入を視野に入れ、今後も本学生の教養教育の改善に努力するという。

本学新海外拠点

山田学長らが北京で交流

本学の国際化に弾み

筑波大学中国交友会設立大会及び筑波大学北京事務所開所式が昨年12月13日、中国・北京市において開催された。式典には本学から山田信博学長をはじめ関係者が参加し、他に中国交友会会員、事務所のある日本学術振興会北京研究連絡センター、北京茗渓会などから約160人が参加した。式典では、参加者と本学関係者が懇談し、また交友会会員同士で旧交を温めあった。

現地で意見交換する山田学長（右端）

式典の前日には「北京茗渓会の集い」が開催され、山田学長や塩尻和子副学長（国際担当）らが出席し、中国北京市などに駐在している本学卒業生で構成される茗渓会の会員と交流を深めた。また、翌日には山田学長ほか本学関係者が本学北京事務所を視察し、福西浩日本学術振興会北京研究連絡センター長ほかと中国における学術研究について意見交換を行った。

本学北京事務所は、中国、東南アジアでの優秀な留学生の確保や学術交流のための支援、情報収集を行っていくなどを目的とし、日本学術振興会北京研究連絡センター内に10月1日、開設された。中国・東南アジアにおける拠点として、他に4カ所ある本学の海外拠点とともに、本学の教育活動における更なる国際化に向け活動している。◇

本学は昨年12月1日、筑波大学ボン事務所をドイツ・ボン市のドイツ学術交流会ボン本部北館内に設置した。本学の5つ目の海外拠点だが、本学が欧州に拠点を設置するのは初めて。

ドイツは、近年受け入れた研究者や本学から派遣した教職員が欧州で一番多い。中でもボン市はドイツの学術関係機関が集中し、ドイツ及び欧州全体の高等教育や学術の動向に関する情報収集に適した場所であることから、今回欧州で初めての拠点が設置された。

本学ボン事務所では、学術交流のための情報収集や支援、優秀な留学生の確保のための業務、本学からの研究者及び派遣留学生の支援などを行う。

大学入試センター試験

7136人が本学で受験

傾向変化見られる

本格的な受験シーズンの到来を告げる大学入試センター試験が先月16、17日に実施され、本学でも6エリアに設置された135教室で、7136人がそれぞれの進路をかけて試験に臨んだ。受験者数は去年より214人増えた。

例年この時期は天候が悪い事が多く心配されたが、当日は晴天に恵まれ、バスや電車などの交通機関に乱れはなかった。毎年プレイヤーの不具合などが発生していた英語のリスニングテストでは、今年も5人の受験生が再開テストを受けた。

試験後、我孫子市の女子生徒からは「国語が特に難しかった」という声が聞かれ、また柏市の女子生徒は「英語の試験からイラストの問題がなくなって、説明文の問題になっていた」と語り、試験が難化、また傾向の変化があり、受験生を悩ませたようだ。

つくば歳時記

センター試験当日。たくさんの「頑張れ」と参考書の入ったかばんを抱え、今年も多くの高校生が試験に臨んだ。（撮影・宇治田輝之＝国際総合学類）

功力靖雄（くぬぎ）本学名誉教授論文集出版

研究の集大成を出版

野球研究発展に携わる

功力靖雄本学名誉教授が「功力靖雄筑波大名誉教授野球関連主要研究論文集」を出版した。この論文集の構成は、①功力名誉教授の野球に関連した主な原著論等を21編、②戦後51年に及んだ先人の1089編にわたる先行研究の文献目録、③功力名誉教授のホームページ「功力ベースボール」の概要の抜粋である。

原著論文の中では、私立大野球部員と国公立大野球部員との比較や、完投と失点の関係、野球のルールなど、野球をさまざまな視点から捉えている。500ページ強にわたる功力名誉教授の力作である。

功力名誉教授は1976年から97年まで本学の硬式野球部を率いた。22年間で、首都大学野球連盟で3度の優勝に導いた。87年の第18回明治神宮野球大会では優勝し、国立大学による史上初の全国制覇という偉業を成し遂げた。

功力名誉教授は00年3月に本学を退官した。その後も今に至るまで原著論文を書き続けている。功力名誉教授は「定年で退官するとおおらかに過ごす人が多いが、私はそうもいかなかったため、今回の発刊に至った」と、発刊の経緯について語る。

発刊の狙いとしては2つあり、1つは功力名誉教授の原著論文をまとめること、もう1つが野球研究における先人の功績を文献目録によってたたえることである。功力名誉教授は「自分が死んだ後もこの論文集があれば、これからの野球研究の発展に自分が携わることが出来ると思う」と発刊の感想を述べた。

功力名誉教授は現在も論文を執筆中だ。今年の6月に雑誌「ベースオロジー」で、これまで60年間の日本プロ野球界における274名の監督についてまとめた論文が掲載される予定だ。

紙面から

嘉納治五郎　生誕150年記念事業　2
反射鏡　私の必須アイテム　4
無絃塾　迫力の演奏で観客魅了　5
女子バレー部　6年ぶりインカレ優勝　8
柔道　グランドスラム3人が優勝　9
バイオeカフェ　JAXAの矢野氏講演　11
特集　6,7
旅立つアスリート
思いと共に新天地へ
ミニ特集　3
退職教員
研究人生を大いに語る

筑波おろし

この時期になるとバレンタインデーの広告が目立つ。義理チョコが多いとは言え、これがきっかけで恋人になった甘いチョコもある▼恋人と聞いて思い出す言葉が「リア充」だ。もともとは現実（リアル）の生活が充実している状態、またはそのような人という意味だった。この言葉は現在では異性と交際関係にある幸せな人という意味で使われることが多い▼人と人との関係の希薄化が叫ばれる中で、「リア充」という言葉が指すように親密な男女関係を築けるということは、その人の人生はかなり充実していると言えるのかもしれない▼自分はどうなのだろうか。入学して早10カ月、大学に対するイメージと現実とのギャップを感じている。入学前は大学は自由な時間がなくさんあり、自分の好きなことが出来ると聞いていた。だが、時間割を組むと、必修科目などでかなりの時間が埋まった。また、授業の予習、復習や課題も多く、自由な時間も限られていた▼私はそれでも充実した生活を送ってきたと思っている。新しい知識を学び、課外活動では友人たちと共に楽しんでいる。恋人がいないことも自由な時間が少ないことも大して気にはなっていない▼人生に同じ時間は二度と来ない。その一瞬一瞬を大切に過ごすことこそが人生の充実に繋がり、一生の宝物になるのではないだろうか。

嘉納治五郎生誕150年記念事業

柔道創始者の業績伝える

筑波に嘉納像建つ

来年度に総合科目新設

柔道の創設者として世界的に著名であり、本学の前身である東京高等師範学校などの校長を23年にわたり務めた嘉納治五郎が、今年で生誕150年となるのを記念した事業が、昨年から本学で展開されている。

嘉納治五郎は日本の体育教育の発展に尽力し、教育者としてもさまざまな業績を残した。日本より、むしろ海外で著名であるが、その業績が語られることは少なかった。そこで今回の事業は、特に本学と関わりの深い嘉納の「教育者」としての足跡にスポットを当て、彼の偉業を広く知らせるのが目的だ。

教育者としても偉大な嘉納治五郎

嘉納は「精力善用」「自他共栄」という、柔道によって自分も相手も心身を鍛え、身につけた体力をよりよい社会作りに生かそうとする考えのもとに、さまざまな教育改革を行った。

例えば、嘉納は日本で初めて体育科や部活動を創設し、心身のバランスのとれた人材を育成した。教師となった卒業生によって体育の重要性は広く認知されるようになり、現在でも学校教育で体育は欠かせないものとなっている。留学生教育にも積極的で、校長在任中に約8000人もの留学生を受け入れた。留学生にも柔道を教え、日本の学生との交流を図ったという。

また当時、高等師範学校を廃し、教員は帝大の教育学部で養成しようという動きが起こった。これに対し学生らは抗議し決起集会を開くなどしたが、嘉納はこれを抑え自ら文部大臣に談判。高等師範学校不要論を撤回させただけでなく、高等師範学校の修業年限を3年から4年に引き上げることを提案し、大学並みの教育水準を持たせることに成功した。これにより、高等師範学校廃止の危機を免れただけでなく、東京文理科大学開学の道が開かれ、現在の筑波大学にまで続いているのである。なお、現在も本学で歌われる寮歌はこの事件の際、当時の学生らによって作られたものである。

今回の記念事業の一環として、昨年12月5日に「嘉納治五郎の偉業・柔道の創始・普及と教育改革」と題したシンポジウムが行われ、嘉納の柔道の普及や教育改革における業績を再評価した。

6月12日にはシンポジウム「嘉納治五郎のレガシー：スポーツ国際交流、そして教育」（仮題）が茗渓会館（予定）で開催される。シンポジストとしてオリンピック金メダリストの山下泰裕氏、オランダや中国の研究者、本学の教授を招き、嘉納の業績をたどることを予定している。また、10月には筑波大学出版会から嘉納の生涯や業績をまとめた「気概と行動の教育者―嘉納治五郎」（仮題）が記念出版される予定だ。さらに、嘉納治五郎を紹介する総合科目も来年度開設される。

記念事業のクライマックスは本学筑波キャンパスへの肖像彫刻の作成・設置だ。東京キャンパスにある銅像と同じ型を使用する。文化勲章受章者の故・朝倉文雄の作。製作のために800万円以上を目標に募金を行い、寄付者の名前を台座に刻む。除幕式は嘉納の誕生月の12月を予定している。この銅像を新たな本学のシンボルとして、本学生の気概や愛校心を高める狙いだ。

記念事業の実行委員会事務局長を務める河辺徳教授（体育）は、「嘉納治五郎先生の教育理念は現在でも通用する。アジア初のIOC委員を務めるなど国際的にも信頼の厚かった人物。新入生は嘉納先生の銅像を見て、自分はすごい大学に来たんだという気概を持ってほしい」とこの事業に込めた思いを語った。

人体科学会年次大会

魂と身体の関係性を探る

学問分野を越えた研究

人体科学会の第19回年次大会「魂のありか」が昨年12月12、13日に大学会館などで行われた。会期中に行われた公開シンポジウムでは同学会の副会長を務める鮎澤聡講師（疾医）をはじめ、芥川賞作家の三浦清宏氏ら5名が講演し、約300人の来場者と人間性の本質などについてやりとりを展開した。

鮎澤講師は「生命は見えない―場の医学と治癒力―」と題して講演し、専門分野である脳神経外科学を例に、人と人、人と自然の心的なつながりを重視した代替医療の研究の必要性について述べた。三浦氏は臨死体験についての学術的な研究の歴史を例とし、霊魂と肉体の関係についての考察を語った。この他、哲学、宗教学などの立場から、魂と人間の存在についてさまざまな見解が述べられた。

人体科学会は、本学教授などを歴任した哲学者（故・湯浅泰雄氏が中心となり1984年に本学で開催された日仏協力・筑波国際シンポジウムをきっかけとして設立された。医学、理学、工学、哲学などの学問分野を越えて、人間性の本質について総合的な観点から研究することを目的とする。

大会終了後、鮎澤講師は「予想以上に来場者が多く驚いた。年末にシンポジウムを開催したことで学生などが足を運んでくれたのではないか」と話した。またシンポジウムでの講演について「現代では物質や契約の科学が発達しているが、見えないものを重視した視点も重要なのではないか。ふとした瞬間に人の根源について考えてみてほしい」と学生に呼び掛けた。

【最終講義】

1月28日現在判明分

◇西川潔副学長＝2月10日、5C216※テーマ未定

【人文社会科学研究科】

◇小畑二郎「政府の経済的役割―不確実性と歴史理論」＝2月19日午後3時、1C310

【数理物質科学研究科】

3月9日午後2時―5時、3A204

◇青木貞雄「人材育成　春夏秋冬―X線顕微鏡開発と共に」◇大嶋建一「たったー秒の歩み」◇工藤博「研究と教育にまつわる私的30年史」

【生命環境科学研究科】

◇金井幸雄＝2月26日午後3時、総A110※テーマ未定◇餅田浩之＝3月9日午後3時半※場所、テーマ未定◇山岸宏「ナムシに学ぶ」＝2月13日午後1時、2H101

【人間総合科学研究科】

◇赤座英之＝2月17日午後4時半、臨床講義室A※テーマ未定◇加藤澤男＝2月27日午午5C213※テーマ未定

（筑波大学新聞調べ）

地域情報共有プロジェクト

子どもの安全守るシステム開発

心拍数の変化などで危険感知も

実験を通して精度を上げていく

就学前の子どもを持ちながら仕事をする親は、昼間自分が目の届かない時の子どもの様子に不安を感じる場合が多い。特に、就学前の子どもの場合は、まだ言葉を通してのコミュニケーションがうまく出来ないため、自分が経験したことを親に正確に伝えることが困難である。そこで本学では、「子どもの安全・安心のための地域情報共有システムの研究開発」というプロジェクトが李昇姫准教授（感性）や岩本義輝准教授（同）、濱中雅俊講師（知機）らにより進められている。

このプロジェクトは総務省の地域ICT研究開発プロジェクト（SCOPE）である。位置や生体、行動の各情報を伝達する仕組みを作ることで、犯罪ハザードマップを自動生成するという内容だ。具体的には、位置情報に加えて、心拍を測定して潜在的に危険な状況を親や保育園の先生、周辺住民に伝える仕組みを新たに作り、それを可能とする装置のデザインを行う。

装置の中にはGPS、カメラ、心拍センサー受信機、マイクロコンピュータの基盤、情報をサーバにとばす通信モジュールが入っている。カメラは子どもの心拍情報や身体の動きに変化がある時だけ作動することで、従来の監視型見守りシステムとは違った個々の主観的危険度を感知する。撮影された写真はサイトにログインして見ることが出来る。サイトを通し、地域ネットワークとのつながりを実現すれば、親だけでなく、地域住民や先生がおお互いに子どもの安全を守ることも可能だ。危険状態が検出された位置情報を用いることで、犯罪ハザードマップを自動生成することが出来る。

李准教授は2006年に保育園児を対象に恐怖や不安に対して年齢と個人の経験による心拍情報の変化を確認しており、生体情報を利用すれば、子どもの危険状態が分かると考えた。しかし心拍数には、個人差があるため、濱中講師が加速度センサーを用い、行動情報を加えることを提案。加速度センサーを搭載したことで、心拍の上昇が運動によるものか、恐怖や不安などの心の働きによるものなのか区別出来る。

装置は子どもに自ら楽しくつけてもらうため、魅力的かつ使いやすいよう、デザインが先行する。李准教授はこれを「キッズフレンドリーデザイン」と紹介する。また子どもが付けるものなので、100g以下の軽量化を目指した。さらに、害者の安全にも役立つ装置にしていきたい」と語った。この装置が実用化されれば、より安全な街づくりや明るい社会が実現出来るだろう。

TXテクノロジー・ショーケース

研究成果ポスターにまとめる

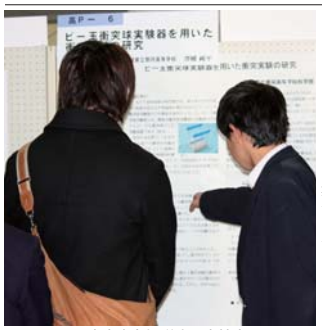
地元高校生ら受賞

第9回TXテクノロジー・ショーケースinつくばが先月22、23日に大学会館で開催された。

今回は、「3E（環境、エネルギー、経済）実現のための科学技術と人材育成」をテーマに、研究者・技術者による研究展示会やシンポジウムなどが行われた。また、サイエンスカフェも開かれ、和やかな雰囲気の中で研究者と高校生の交流が図られた。両日行われたポスター発表では、高校生が日頃の研究の成果をポスターにまとめ、来場者に説明した。

23日の発表の後、表彰式が行われ、優秀な研究発表を行った高校生が表彰された。徳宿邦夫さん（竹園高2年）、加藤里紗さん（水戸第二高2年）、永田夕貴さん（同）が、それぞれノーベル賞受賞者でつくばサイエンス・アカデミー会長の江崎玲於奈氏からベストポスター賞を受けた。

徳宿さんは「アメタンパクの摂食に対してナメコの粘性表皮が与える影響」をテーマに発表。「初めてのポスターセッションは貴重な経験だった。同じような研究をしている方にも話が出来て、将来を考える上でとても参考になった」と感想を話した。表彰の後、江崎氏は「人生のシナリオでは自分が主人公。自分が何を得意とするか、何を使命とするかを見つけてほしい」と会場の高校生にメッセージを送り、2日間の日程は幕を閉じた。



研究内容を解説する高校生

増田精一氏（ますだ・せいいち＝本学名誉教授）1月19日、死去。87歳。喪主は妻・綾子さん。1975年本学歴史・人類学系教授。98年勲三等瑞宝章授章。

松浦義丁氏（まつうら・よしゆき＝本学名誉教授）1月10日、死去。80歳。喪主は妻・邦子さん。75年本学体育科学系教授、92年体育専門学群長。08年瑞宝中綬章。

中山和彦氏（なかやま・かずひこ＝本学名誉教授）1月11日、死去。76歳。喪主は妻・順子さん。74年本学電子・情報工学系教授。75年計算センター長、78年学術情報処理センター長。

渡部晨隆氏（わたなべ・かげたか＝本学名誉教授）1月10日、死去。92歳。喪主は長男・芳夫さん。

高橋進氏（たかはし・すすむ＝本学名誉教授）1月22日、死去。82歳。喪主は妻・恵子さん。74年本学哲学・思想学系教授。77年附属図書館長。79年副学長。94年白百合大学長。04年八洲学園大学長。

工藤喜作氏（くどう・きさく＝本学名誉教授）1月22日、死去。79歳。喪主は妻・とし江さん。83年本学哲学・思想学系教授。

退職教員インタビュー

研究人生を大いに語る

これまでこれから

今年もお世話になった多くの教員が退職される。勉強以外にもさまざまなことを教えてもらった人は多いだろう。〝先生に学問を教え、そして自らも学問に人一倍打ち込んだこれまでを振り返ってもらった。（本紙・西内彩香＝人文学類、西川大照＝社会学類、宇治田輝之、隅田聖彦＝国際総合学類）

竹内光弘教授（代数学）

「数学は積み重ねの学問。レンガを積むようなもの」。ホップ代数を研究してきた竹内光弘教授（数学専攻）は講義でいつもそう説く。数学の講義はすべての回で打ち込んだ内容を理解するひとつながりで、継続して受講しないと理解するのが困難になるからだ。

本学に赴任してほどなくアメリカのプリンストン高等研究所に招かれ、2年間籍を置いた。「現地の大学で講義をしたとき、カルチャーショックを受けた」。話し方が下手だと学生がどんどん退室していったのだ。「学生の教員に対する評価が厳しい」という印象を受け、その後は話し方を工夫するようになった。

日元に立派にたくわえられたひげのルーツは、実はアメリカにある。子供と思われることが嫌で、伸ばし始めたのがきっかけだが、今では〝ひげの哲学〟を持つ。「自然に伸びてくるものを、毎日朝るのは不自然。だからひげを伸ばしている」というものだ。

竹内教授を「厳しい人」と見る大学院生もいるようだが、教授を慕う熱烈な〝竹内ファン〟もいる。それは10人ほどの少数精鋭で、中には第一線で活躍する教えを読んで勉強していた教授にとっては、信じ難いことだ。

高校時代は理系科目全般が好きで、特に数学が好きということも、学者を目指していたということもなかった。「数学者になったのは、積極的理由ではなく消去法だった」と振り返る。大学入学後、2年生で学部を決めることになる。あいまいなことを嫌い、専攻分野を物理と数学に絞った。結局「自分で解決出来る学問」である数学を選んだ。「物理は論理に飛躍があるが、数学は論理的で明確だ」と語る。

数学の中でもより論理的な代数学を専攻することにした。代数学は数字の代わりに文字を用いて方程式の解を導く学問だ。幾何学など他の分野は小さいミスが時折あり、「細かい性格の自分には合わない」と考えた。指導教官の助言で、70年代当時マイナーだったホップ代数が狙い目だと思い研究することに決めた。

「数学は必ず答えがあると思われがちだが、それは間違いと教授は一蹴する。そもそも数学は『考える学問』。問題解決に向けた努力が必要で、未だに解けていない難問は多い。そんな数学を通じ、学生たちが自分で考え、行動することが教育面でのテーマだった。だが「最近ではコンピュータを使えば何でも分かると、自分で考えない人が増えており、残念だ」と話す。

退職にあたり気掛かりな生命環境学群長、総合科目編成委員会委員長としても活躍した。情報が溢れる現代、多くの悩める学生を見てきた。「大学は1つの通過点。大学で何もかも決まるわけではないのだから、自分なりのテーマを持って追求してほしい」と若い世代に語り掛ける。

金井教授自身も、最初から研究者を目指したわけではない。大学院を卒業後、東京都庁畜産課に就職し1年間都内や伊豆諸島の農家へ出向いた。修士号を持った若者がやってくることに地元の人々は期待していたという。しかし実際に現場で働くと、知識が足りないと痛感した。そんな時、母校・東京教育大学で助手をやらないかと誘われた。「勉強をやり直せる」そう思い誘いに乗った。

数年後、東京教育大学の移転に伴って本学へと移った。「出来たての筑波大学には、他がやっていないような研究をやってやろうという人が大勢いた」と振り返る。金井教授も、そのころは研究の進んでいなかった熱帯の農業と畜産を対象にした、本学のプロジェクトに参加した。そこで後の研究対象となるフィリピンの水牛と出会った。

当時、経済成長を始めていたフィリピン。経済が成長し農業が機械化すれば、農作業に使われてきた水牛の役割が変わる。現地の研究者たちと水牛の品種改良や新しい利用法を研究していると逆へしか返せなかった。しかし教授は決して自分が嫌いなわけではない。「これだ！」と思える言葉、「日本語」と出会った。しかし、出身のドイツでは日本語の研究が進んでいなかったため、イギリスに渡って研究をした。「高校時代までは好きなことが出来なくて地獄だった。大学でやっと開放感を味わった」と当時を振り返る。それは「言語」の研究が好きなのだ。

教員になり、初めて着任したのは西オーストラリアだった。オーストラリアでは経済学部の中に日本語学科があった。「大気の良い日に、学生と芝生でビールを飲みながら授業することもあった」と笑顔で語る。日本ではそういうことが出来ないのを残念がっていた。

本学で教壇に立って16年半になる。授業をしていて、学類生が自分の意見を言わないことに驚いた。イギリスやオーストラリアの学生、本学で学ぶ留学生とは全く違っていた。一方で、院生になるとアイコンタクトもとれるし、自分の意見も言うようになる。ヨーロッパでは高校生でも自分の意見をはっきり言うので、教授にはとても不思議に思えた。「大学に入る前段階の教育の在り方のせいだろうか」と分析する。

また、教授は研究者として日本や本学の問題を冷静かつ鋭い目線で見ている。「海外経験がない先生は視野が狭く、研究分野以外の知識に乏しい」とながながと辛口な意見も出る。しかし、問題点を指摘し、改善していくためにはこういった視点が必要である。日本や本学を大切に思っているからこそ厳しく見てしまうのだ。「大学ではやりたいことが出来るのだからもっと積極的になってほしい」と学生にエールを送る。

退職後は房総半島の海辺の田舎で過ごす。田舎は外国人に対する偏見がなく、誰でもあいさつを交わすところが魅力だ。地元の人とゆっくり釣りなどを楽しむ予定である。（西内）

畜産研究に没頭

金井幸雄教授（畜産学）

「ある西部劇映画に出てきたバーベキューにあこがれて牛に興味を持ったんです」。笑顔でそう答えるのは、東京教育大学から本学へ畜産学に取り組んできた金井幸雄教授（生物圏）だ。

ひげの哲学を貫く

「ルールや道徳に反し悪いことをする子どもは、いい子として育った子どもよりもよい大人になる可能性があるのではないか。」新井邦二郎教授（ケア）は本学での最後の研究についてこう語る。

新井邦二郎教授（発達心理学）

教授の専門は、児童心理学。児童心理学では、子どもの精神的な発達を研究する。現在の研究テーマに興味を持ったのも、近年いい子として育ってきた子どもの非行が増えてきている状況があるからだ。「すっとはいい悪いではない。子どもは少しぐらい羽目を外してもいいのでは」と笑いながら話す。

教授が心理学に興味を持ったのは高校生の時。教員志望ということもあり、子どもが物事をどう考えているのかということに興味があった。そのため、その人がどう生き、どう考えているかという現実を研究する心理学を選んだ。しかし、当時の大学では人間の心理学の研究はあまり行われていなかった。「チンパンジーなどの動物の心理学ばかりで、最初は期待外れでした」と懐かしそうに振り返る。

そのころ、教授は学校の授業についていけない子どもの存在に関心を持った。そして研究を進める上で、ヴィゴツキーの「思考と言語」という本に出会う。子どもの精神発達は人とのやりとりの中で生まれると論じる、この本との出会いで研究者の道を選んだ。

教授の主な研究テーマは自己決定理論だ。子ども自身が「これをやる」と決めることが重要だという研究である。親の敷いたレールを歩き、自分で決定した経験がないことが、子どもの精神的な成長に悪影響を与えると考えたのだ。

大学生にとっても自分で決定を下すことは大切なことだ。そのため教授自身が担当するゼミ「発達臨床心理学演習」では「自分の感じ方を大切に、自分の頭で考え、自分の言葉で表現する」をスローガンと掲げた。「考える」の前に「感じる」を置いたのは自分の感性や直観が「自分で考える」ことの基礎となるからだ。演習では学生からの「質問・疑問」を重視する。質問・疑問が出るということは学生の感性、直観が働いたということ。それが「自分で考える」ことにつながるのだ。そしてその感性や直観を反映し、論理的にまとめられたレポートは冊子にして学生に渡す。冊子は平成8−21年で計14冊となり教授の宝物になった。冊子をもらった学生たちの卒業研究への取り組み方にも「自分で考える」姿勢が確認出来、うれしくなるという。

「人間にとって1番大切なのは興味や好奇心。それはその人の宝物であり、人生を生き生きさせる。それを信じて伸ばしていってほしい」と学生たちに語り掛けた。（西川）

広い視野で学問探れ

カイザー・シュテファン教授（日本語学史）

「授業中に下を向いていたり、寝ていたりする学生もいる。発言もせず、自由に意見を交わす雰囲気がない」と穏やかな声で厳しいことを言うのはカイザー・シュテファン教授（国地）だ。自分の授業態度を考えると、「その土地に適応している生物を有効に使う。それこそが畜産学・農学の役割だと思う」と語る。

何度もフィリピンへ渡った。「日本でも東京とつくば単身赴任だった。行き先がフィリピンに変わるだけ。研究が楽しくて辛さなんて感じなかった」と話す。

研究の日々には新しい出会いもあった。フィリピン固有で絶滅寸前の野生水牛、タマラオを守ろうとする人々との出会いだ。「山奥に暮らすタマラオを調査する人々と出向いて畜産を教えたい」と金井教授は夢を膨らませている。（隅田）

見た目は典型的な西洋人だが、授業は「おはようございます」で始まり、流ちょうな日本語で授業は進む。非漢字使用者が漢字をより効率的に学習するための研究をしていて、漢字教育用のデータベースを作成するほど日本語に堪能だ。そのため、日本生まれなのかと思ったら意外にも日本語と教授の出会いは遅かった。

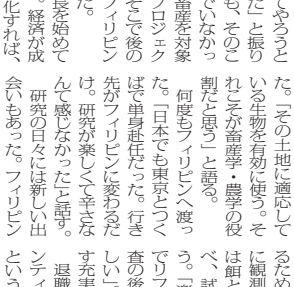
高校時代から語学が得意で、大学でも何か言語を勉強しようと考えていた。しかし、ヨーロッパの言語は似たり寄ったり。どうしようか迷っている中、高校卒業後にした世界一周の中で退職後も日本で過ごす予定であるほど日本好きだ。

「日本語」と出会った。「その土地に適応している生物を有効に使う。それこそが畜産学・農学の役割だと思う」と語る。

研究対象となるフィリピンの水牛と出会った。

当時、経済成長を始めていたフィリピン。経済が成長し農業が機械化すれば、農作業に使われてきた水牛の役割が変わる。現地の研究者たちと水牛の品種改良や新しい利用法を研究している人々との出会いだ。山奥に暮らすタマラオを調査する人々との出会いだ。「フィリピンでも固有で絶滅寸前の野生水牛、タマラオを守ろうとする人々との出会いだ。山奥に暮らすタマラオを調査する人々との出会いだ。「フィリピンでもアフリカでも、どこへでも出向いて畜産を教えたい」と金井教授は夢を膨らませている。（隅田）

学生から得た宝物



金井幸雄教授（畜産学）

「ある西部劇映画に出てきたバーベキューにあこがれて牛に興味を持ったんです」。笑顔でそう答えるのは、東京教育大学から本学へ畜産学に取り組んできた金井幸雄教授（生物圏）だ。

金井教授自身も、最初から研究者を目指したわけではない。大学院を卒業後、東京都庁畜産課に就職し1年間都内や伊豆諸島の農家へ出向いた。修士号を持った若者がやってくることに地元の人々は期待していたという。しかし実際に現場で働くと、知識が足りないと痛感した。そんな時、母校・東京教育大学で助手をやらないかと誘われた。「勉強をやり直せる」そう思い誘いに乗った。

数年後、東京教育大学の移転に伴って本学へと移った。「出来たての筑波大学には、他がやっていないような研究をやってやろうという人が大勢いた」と振り返る。金井教授も、そのころは研究の進んでいなかった熱帯の農業と畜産を対象にした、本学のプロジェクトに参加した。そこで後の研究対象となるフィリピンの水牛と出会った。

当時、経済成長を始めていたフィリピン。経済が成長し農業が機械化すれば、農作業に使われてきた水牛の役割が変わる。現地の研究者たちと水牛の品種改良や新しい利用法を研究している人々との出会いだ。山奥に暮らすタマラオを調査する人々との出会いだ。「フィリピンでもアフリカでも、どこへでも出向いて畜産を教えたい」と金井教授は夢を膨らませている。（隅田）

退職後は海外シニアボランティアとして活動したいという。「フィリピンでもアフリカでも、どこへでも出向いて畜産を教えたい」と金井教授は夢を膨らませている。（隅田）

退職後は房総半島の海辺の田舎で過ごす。田舎は外国人に対する偏見がなく、誰でもあいさつを交わすところが魅力だ。地元の人とゆっくり釣りなどを楽しむ予定である。（西内）

るため、朝夕に双眼鏡を手に観測所に出向いた。昼には餌となる草を刈って調べ、試料となるフンを拾う。「楽しい。大自然の中でリフレッシュ出来る。調査の後は、ご飯も一層おいしい」。研究意欲はますます充実している。

退職後は海外シニアボランティアとして活動したいという。「フィリピンでもアフリカでも、どこへでも出向いて畜産を教えたい」と金井教授は夢を膨らませている。（隅田）

反射鏡

故郷から届くなつかしの味

藤田咲織（人文1年）

故郷から遠く離れたつくばに移り住んでもうすぐ一年が経ちます。もともと「家事？なにそれおいしいの？」な私でしたが、なんとか一年間生き延びることが出来ました。それもこれも、両親並びに親類の皆さまから送られてくるお米とアレのお陰です。

アレとは何か、それは「おせんべい」です。ほぼ毎日、ぼりぼり食べています。彼らの能力は侮れません。彼らは食べやすく、ごはんの代わりにもなる、画期的な食品なのですよ。その活躍の場は運刻ぎりぎりで忙しい朝から食費を使い込んで飢える月末まで。しかもカロリーメイトより安い！

私にとって、地元新潟から送られてくる彼らはお腹具合的にも大きな味方になりますが、それ以上に、精神的にありがたい代物です。食べると何となく故郷を思い出して頑張れそうな気がするのです。特に引っ越しできたばかりのころはことあるごとに心が折れそうだったのでお世話になりました。

そんなおせんべいですが、実は結構種類があります。例えば白くて丸い「雪の宿」は珍しい甘じょっぱい味。初めて食べた時はカルチャーショックでした。新潟県民おなじみの「ばかうけ」は食べやすい小さな細長の形。つぶはにも売ってるので食べたことがある人も多いのではないかと。正直、商品名でハード上げすぎだと思います。同社の「ハッピーターン」は包み紙に……まあ食べてみてください。そして皆大好き「柿の種」。ピリ辛なその味はもはや定番ですね！ピーナッツとの相性が最高です。最近見かけないんですが、まさか県外では売ってないとか言いませんよね？私の探し方が悪いだけですよね？時間もお金もない大学生の味方、おせんべい。卓にもいかがですか？

以上、米農家の回し者からのレポートでした。

元気をくれる感謝のメール

重原美緒（教育3年）

私の必須アイテム。それは、携帯電話……って結構普通ですね。すみません。いやいやしかし、大事なのはその中身。私は受信メールのなかに「モチベーション」という名前のフォルダを作って、その中に友達や知り合いの人から頂いた感謝のメールを入れるようにしています。私の尊敬する人がやっていて、速攻で真似してみました。

最初は何でこんなことするのかなぁ……と思っていたんですが、その効果は絶大！就職活動中の今、自分に自信がなくなってしまった時や何となく気分が落ち込み気味な時にこのフォルダを見て、元気をもらっています。そうするとあら不思議、自分もなんだか感謝の気持ちを人に伝えたくなってくるんです。

人から「ありがとう！」って言われてうれしくない人なんていないと思います。だったら1回でも感謝の言葉って口に出したほうがいいなぁって。そうすることによって自分の気持ち良くいられるし、自分に関わる人たちが知らず知らずのうちに力になってくれる。そのおかげで今、私は素晴らしい出会いに恵まれて毎日を送っています。

就職氷河期とか世間では言われているけれど、ちょっとした考え方や行動の変化で状況は変えられるんですよね。

ESや面接練習もいいけど、まず身近なところから自分の気持ちを伝えられる素敵なって思います。

勉強に娯楽にパソコンは万能

高野禎之（生資1年）

自分の必須アイテムはパソコン、以上。というわけにもいかないので少しだけ加筆させていただきます。

パソコンというものは非常に便利です。何でも出来るんじゃないでしょうか。戦争にも勝てるでしょう。人によって使い方はさまざまでしょうが、私の普段の使い方から三通りほど紹介させていただきます。

1つ目は、レポート作成。大学生の皆さんなら、当然のことでしょう。書き換えとか簡単で便利ですよね。レポートの他にも、色々なモノが作れます。音楽やイラストだって作れちゃいます。

2つ目は、情報収集。作成作業には豊富な情報が欠かせません。文字を入力するだけで、欲しい情報がすぐに手に入ります。外出しなくても、今期の新作アニメの評判を知ることが出来ます。

3つ目は、娯楽。良いものを作るには、適度な息抜きも必要です。笑うことは脳の活性につながるとか。

つまりニコニコすればいいと。ニコニコといえば動画配信サイトですが、私がよく利用させてもらっているカテゴリは「VOCALOID」です。オリジナルだけでなく「歌ってみた」、「PV描いてみた」などの大変楽しい派生も注目です。また、これらは息抜きだけでなく作業用BGMとしても使わせてもらっています。聴くことが作業なんってよくあることです。もう気にしません。

さて、パソコンはオタクを増殖させる「パンドラの箱」だというお話でした。読んでくれた方、ありがとうございました。以上、広鼻水、よだれ……体から出る有るあらゆるものを処理出来るのです。体を汚れたままにするのが嫌な僕は、ティッシュでそれらを頻繁にぬぐうのです。

もちろん家でも使います。僕の部屋にはゴミ箱が2つありますが、どちらもティッシュで一杯です。こちらも、鼻をかんだり口をふいたり手をふいたりしたものなのですが、一杯です。ゴミ箱が、ティッシュで。そのくらい使います。究極の生活用品だと思います。

ティッシュに関して重要なことは、その使いやすさです。理論上、口や鼻だけでなく、机や壁など、何でもふくことが出来ます。「柔らかい布で」＝「ティッシュで」と解釈する人も少なくないでしょう。

つまるところ、ティッシュは持っていれば何にでも使えるのです。もちろん、海外で脱脂綿の代用品として開発され、後に日本でも製品化されたものですが、この世紀の大発明に対して、もっと敬意を払うべきなのではないでしょうか。

究極の生活用品ティッシュに敬意を

柏零（社工3年）

僕の必須アイテムは「ティッシュ」です。僕は普段から、鞄ティッシュを鞄に入れて持ち歩いています。常にティッシュが無いと不安なのです。

何に使用するのかですが、主に鼻をかみます。その他にも、口や手をふいたりするのに使います。涙、鼻水、よだれ……体から出る有るあらゆるものを処理出来るのです。体を汚れたままにするのが嫌な僕は、ティッシュでそれらを頻繁にぬぐうのです。

もちろん家でも使います。僕の部屋にはゴミ箱が2つありますが、どちらもティッシュで一杯です。こちらも、鼻をかんだり口をふいたり手をふいたりしたものなのですが、一杯です。ゴミ箱が、ティッシュで。そのくらい使います。究極の生活用品だと思います。

ティッシュに関して重要なことは、その使いやすさです。理論上、口や鼻だけでなく、机や壁など、何でもふくことが出来ます。「柔らかい布で」＝「ティッシュで」と解釈する人も少なくないでしょう。

つまるところ、ティッシュは持っていれば何にでも使えるのです。もちろん、海外で脱脂綿の代用品として開発され、後に日本でも製品化されたものですが、この世紀の大発明に対して、もっと敬意を払うべきなのではないでしょうか。

筑波時評

足利事件再審
問題は検査者の技能の精度
捜査機関は徹底的に反省を

科学というのは純客観的で、得られた結果は絶対性を有すると考えられがちであるが、それをつくるのも使うのも人間であるということは忘れられていることが少なくない。

私は筑波大学・人間学類の第1回生として心理学を専攻し、人間の認識というものの不可解さに遭遇し、人間の実体を極める医学に期待して、本学医学専門学群の再入学へと向かわせたのであったが、そこでさらに究極の客体である「人間の死」を追求するため、法医学を専攻した結果、再び人間の認識が引き起こす大きな錯誤に直面するとは思っても見なかった。正直なところ、最高裁で正しいとされたDNA鑑定が不一致になるとは、当初、とうてい信じることが出来なかった。しかし、これはまさに心も凍るような恐ろしい現実であったのである。

旧鑑定の失敗については、DNA鑑定の精度不足の問題がよく取り上げられている。そして現在のDNA鑑定法は地球の全人口の1人を特定できる精度があるのに比べて当時の精度は数百人に1人でしかなかった、とよくいわれる。しかし数百人に1人を識別できるというのは、偶然ではありえないほどの高い精度を持っているのは事実である。

したがって問題はむしろ検査者の技能の「精度」であると見なければならない。なぜなら検査者の技能がなければ、いかなる検査でも失敗に終わるからである。そしてこれは、犯罪捜査のDNA鑑定においては、証拠試料は微量かつ時間を経過しているため、そこからDNAを復元できる技術が不可欠となるような、大変な難しさがあることにも起因している。つまり証拠試料の限界の上に鑑定人としての能力がそこに問われるのである。

もっといえばDNA鑑定自体の精度が上がるほどに、また難しい試料であるほどに、より高い技術者のレベルが要求されるということになる。したがって旧鑑定においては、時代性としても機関や個人としても、検査の型と強引に合わせようとした結果、不一致の可能性を含むものを強引に一致と見てしまったという方が正しい。

したがって、あいまいな結果でしかないのに絶対的な信頼性があるかのように誇張し、日本で初めてDNA鑑定を成功させたかった捜査機関と鑑定人の功の急ぎに加え、裁判所が再鑑定の実施を18年も拒絶したことが、いわゆる冤罪を生んでしまった最大の原因であると言わざるをえない。

本田 克也

いずれにしてもDNA鑑定は一つの証拠でしかなく、これさえ合えばすべてが解決するという盲信は危険である。捜査機関は今後、このような悲劇を繰り返すことのないよう、本件への反省が徹底的に行われることを期待したい。（シス医・教授）

◆足利事件＝1990年5月12日、栃木県足利市のパチンコ店駐車場から行方不明になった女児が翌日、渡良瀬川の河川敷で遺体となって発見された。

91年に行われたDNA鑑定で、菅家和氏と女児の着衣に付着していた体液のDNAが一致したとされ、菅家氏が逮捕、起訴された。

08年12月の東京高裁の決定によって行われた再鑑定では、弁護側と検察側の両鑑定人より菅家氏と女児の着衣に付着していたDNAが一致しない結果が示された。これを受けた東京高裁は再審開始を決定し、菅家氏は17年ぶりに釈放された。

留学生の目

ホゥアンパブロ・ロドリゲス

日本に来てからの留学生の間で「日本人は友達になってくれない」という愚痴をよく耳にする。外国、特によくアミーゴ（友達）の国と呼ばれるメキシコの視点から観ると、地位を大切にする日本社会の中であつい友情は日本人同士の間でも珍しいと思われる。日本では上司部下関係は固くて、学校でも先輩後輩の制度が厳しいと言われる。

「友達」の範囲はどこまで？

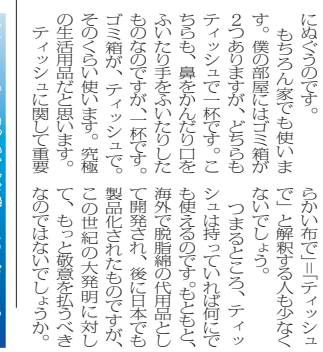
日本の「友達」のイメージとずれているのではないかと私が思う。例えば、メキシコの場合は、知り合いでも、親友でも普通に友達と呼ぶ。だが、日本語だとほとんどの場面では「友達」という言葉はそのように軽くて広い使い方をしない。

その代わりに日本語では「友達」だけでなく「幼なじみ」や「仲間」という語もある。特に「仲間」はスペイン語や英語に直訳しても、この言葉が表す親しみとつながりは訳せないだろう。仲間もあついアミーゴの一種だ。

そして、友達はどういう人だと定義してみると、仲良くて、一緒に遊びに行って、個人的な話までをしてくれる人だと言ったら、後輩先輩の関係も外国の「友達」に当たると言えるのではないだろうか。

日本の友情の形は他の国と比べてみるとそれぞれだが、一緒に楽しい時間を過ごし、困っている時にお互いを助けあう心に変わりがないであろう。

（日本語・日本文化研究留学生・メキシコ）



次号のテーマは
私のおすすめスポット　です

連絡先
TEL　029・853・6699
e-mail　shinbun@sakura.cc.tsukuba.ac.jp

第12回無絃塾卒業講演
迫力の演奏で観客を魅了

ブラスアンサンブルとのコラボ
豪華ゲストも多数登場

本学の津軽三味線倶楽部「無絃塾」の第12回卒業公演が先月24日にノバホール（つくば市吾妻）で行われた。塾長である井坂斗絲幸さんの率いる民謡・津軽三味線の喜多会や、民謡の吉田昌紀子さんなど、豪華なゲストを多数招いて、和楽器の美しい音色や力強い歌声に合わせ、パワフルなパフォーマンスで観客を魅了した。

卒業生紹介の口上で幕を開けた第1部では、お国なまりの「おてもやん」や「南部俵積唄」など、全国各地の伝統的な民謡を中心とした曲目で観客を引き込んだ。

続く第2部では、無絃塾のオリジナル曲や卒業生の独奏が披露された。恒例となっている「お祭りコーナー」では、市内で活動するブラスアンサンブルのY.T.B.E.が加わり「風になりたい」や「YAH YAH YAH」など、なじみのある曲で観客も一体となって盛り上がった。最後は100人を超える一津軽じょんから節」の大合奏で締めくくられ、会場の熱気は最高潮に達した。

公演の中ではこれまでの活動を振り返るスライドショーが映し出され、「感謝の言葉コーナー」が設けられるなど、感動的な場面が多く見られた。

市外から来た女性は「10回以上来ているが、毎回凄い迫力に感激している。元気をもらえた」と話した。

色鮮やかな和服で演奏を披露した

Doo—Wopコンサート
歌と踊りで会場沸かす
個性的な演出盛り込む

アカペラサークルDoo—Wopのクリスマスコンサート「Christmas Special Live 2009」が、昨年12月23日に大学会館ホールで開かれた。

コンサートではDoo—Wop内の5つのグループが歌声を披露した。各グループは劇仕立てなど個性的な演出を使い、クリスマスにちなんだ曲をアカペラで歌った。

4番目に登場した「SHORT☆ARROW」は、ステージの前に飛び出した曲に動物の鳴きまねを入れたりとユーモア溢れる歌と踊りで会場を沸かせた。

観客の土佐岡遼さん（生資1年）は「どのグループもレベルが高く感動した。『SHORT☆ARROW』の時は場がとても盛り上がって楽しかった」と感想を話した。

アートスペース　木村浩展
「記憶」シリーズ展示も
2月末まで開催

本学の木村浩准教授（芸術）の作品展である、「木村浩展—筑波大学芸術系教員によるアートとデザインの作品展—」が、先月12日から今月28日まで、大学会館アートスペースで行われている。

本作品展は、情報デザインなどを研究している木村准教授の写真やドローイング、デザインワークの作品が展示されている。本学ウェブサイトのデザインや、附属病院のサインインシステムのリニューアルなどのデザインワークの他、写真作品などが見られる。

写真作品の1つである、「記憶」のシリーズは、カメラを持った3人が同時に互いの写真を撮り合うという不思議な構図で来場者の目を引いた。

作品展に訪れた石塚友さん（人文1年）は、「ウェブページなどをデザインする人がどんな人かわかった。附属病院のリニューアルなど、より良く変えてゆこうとする意欲が伝わった」と話した。

第6回DC展
本学の院生が力作を展示
珍しい題材の作品も

本学大学院の人間総合科学研究科芸術専攻のうち、洋画、日本画、彫塑、書の博士後期課程の学生ら15人による第6回DC展が、先月2—11日の10日間、茨城県つくば美術館（つくば市吾妻）で開かれた。例年は年末年始をまたいだ開催となっていたが、今年は年明けからの開催となった。今回は43点の作品が展示され、期間は1300人を超える人が訪れた。

DC展は、人間総合科学研究科の学生が日頃の研究成果を発表する場である。会場設営は学生が授業の一環として行った。老若男女問わず好評で、毎年訪れる人も数多く見受けられるという。日本画の作品には、白田誉主也さん（芸術後期3年）が、日本画には珍しいカバやサイなどを題材に、カラフルな作品を展示した。

洋画3点を展示した舩臣紘行さん（芸術後期3年）は、「普段アトリエで誰の目にも触れず描いているので、こうした発表の場で、反応が返ってくるのがうれしい」と語った。

洋画作品に見入る来場者

混声合唱団定演
歌声で観客見送る
ギターやシンバルで伴奏

筑波大学混声合唱団の第34回定期演奏会が昨年12月20日にノバホール（つくば市吾妻）で行われた。演奏会は4つのステージからなり、アンコールも含め、「飛行機よ」や「瞳をとじて」など全20曲が歌われた。

第2ステージでは、合唱の伴奏にギターとシンバルが用いられた。合唱の伴奏というとピアノをイメージするが、ギターやシンバルの伴奏は違った印象を残した。シンバルを伴奏に歌い上げられた曲では、何かがゆっくりと迫ってくるかのような迫力が観客を包んだ。第3ステージのソロパートでは、美しい歌声が観客を魅了した。

演奏会の終了後には、肩を組んだ合唱団員らが歌いながら観客らを見送り、観客らから、団員に盛大な拍手が贈られた。

横浜市から来た合唱団OGの女性は「ギターやシンバルを使う合唱は初めて見た。とてもおもしろかった」と話した。

原点 GEN-TEN

大学院時代の体験が影響
工学と理学の融合目指す

私が触媒研究の魅力にとりつかれたのは修士課程のころです。指導教官の影響が大きかったと思います。私の先生は「触媒作用のからくり」を解明する名人でした。独自な実験方法を編み出し、巧みに実験し、実験結果から論理的にメカニズムを明らかにしてゆくのですが、その見事な論理的展開には驚き感動しました。実験、解析、論理的考察というサイクルを繰り返していく過程を、先生は「自然との対話」と言っておられました。

私は金属表面に析出する炭素種の反応性について研究しました。これは実用的触媒反応のメカニズムに関する研究です。カーボンナノチューブや、最近はやりのグラフェンの生成過程と密接に関連するものです。手作りの実験装置がようやく完成したころ、先生が他大学に転出されることになりました。その後、実験結果の解析を一人で考えざるを得ない状況となりました。先生とは遠距離電話や手紙で議論しました。日夜続けた実験と必死に取り組んだ論理的な解析によって、金属表面で起きている反応のメカニズムが見えてきました。初めて英語の論文を国際誌に投稿したところ審査員から「SUPER PAPER」というコメントをもらい、大きな自信になりました。

もうひとつ、貴重な経験があります。私は、学部と修士の課程を工学部で過ごし、博士課程からは理学部に所属しました。工学部と理学部の雰囲気はたいへん異なっていました。工学部の先生は企業とのつながりもあり世慣れした印象でしたが、理学部の先生はまさに自然相手の浮世離れした感じがしました。学生も雰囲気が違っていました。私は、工学部では実用上有用な固体触媒のメカニズムを研究し、理学部では固体表面を詳細に研究する表面科学という分野を専攻しました。

このころ、実用的に用いられる工業触媒の開発や研究にとって、理学的研究、つまり表面科学の研究が必須であると実感しました。表面科学の研究で学位取得後、米国留学を経て、筑波大学に職を得ましたが、筑波大学では触媒化学と表面科学の融合、つまり工学と理学の融合を目指すことにしました。それが現在の私の研究の特色です。今、研究室メンバーは実用触媒と表面科学の2グループに分かれ、融合的アプローチにより、新触媒の開発や触媒作用原理の解明に取り組んでいます。

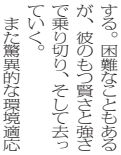
このように、大学院時代の新鮮な体験のひとつひとつが私にとって「研究の原点」なのだと思っています。

中村潤児

●●●●●●●

なかむら・じゅんじ
1957年生まれ。数理物質科学研究科物質創成先端科学専攻教授。北海道大学大学院理学研究科化学専攻博士課程修了。東京大学院理学研究科化学専攻博士課程修了。専門は表面化学と触媒の融合研究。

コミックから見る江戸文化
カムイ伝講義
田中優子著


後藤博正

白土三平著のカムイ伝というコミックがある。古くから（1960年代の高度成長時代から）のものであり、現在も続いている。主人公カムイは江戸時代の忍者の組織出身であるが、あるとき本人の意思とは別に、生きるためには組織を抜けるしかない状況に陥る。忍者組織は抜け忍を許さない。この中でカムイは優しく義理がたい人物に思えてくる。この作者、白土三平氏とは一体どういう人なのだろうか。

絵は一種独特で、幻想的な感ずらある。カムイ伝とは別にカムイの生き残りに賭ける側面から描いた「カムイ外伝」もある。カムイ伝・カムイ外伝を通し、当時の庶民の生活が詳細に紹介されている。

著者である田中優子氏は江戸時代に関する研究者である。「カムイ伝講義」において、カムイを通し民俗学も盛り込み、江戸時代の文化、生活を現代社会と対比させながら当時の農業・山・海・武士・庶民などについて分かりやすく解説している。そして、これらは現代にもつながることでもあるが、いくつかは忘れられてしまっていることも述べられている。さらに、今の社会に無用と思われている事柄の中に、真に社会や世界の救いになるものがあるとつづられている。同時代の人々が必死に生き、人生を全うする生き様も解説されている。

現代社会ではインターネットによる高度な通信や情報化、そして交通機関の発達がなされ、過去とは比べ物にならぬ程すべてが高速化され、また物もあふれ便利になっている。しかし実生活や人生を考えた時、現代は、そのころに生きた人たちと何がちがうのだろうかとの疑問が生まれる。（小学館・1575円）

（物分・講師）

思いと共に新天地へ

本学のスポーツ界を熱くしてくれたアスリートたち。栄光の裏側には、彼らのひたむきに努力する姿や、挫折を乗り越える強さがあった。この春本学を離れる彼らが、それぞれの思いを語ってくれた。（本紙・光安素子、雪丸千彩子＝人文学類、磯野潤、牛尾仁実＝社会学類、根津彩香＝国際総合学類、扇本剛司＝社会工学類）

恩師との出会いが転機
技術の追求、本気で目指す

碓井健平（うすい）（サッカー）

大学屈指のGK（ゴールキーパー）としてチームを支えた碓井健平（体専4年）が戦いの場をJリーグ1部へ。碓井も幼少からサッカーに親しんだ。中学から清水エスパルスへと移ります。父・博行さんは日本代表GKとして活躍、数々の成績を残す。その後、文武両道を目指し本学に入学。

碓井は1年生から試合に出場し順調なスタートを切ったがチームは徐々に低迷。2年のリーグ戦では本学初の2部降格の危機も経験した。しかしこの時チームは最終戦で逆転勝利を収め、劇的な形で残留を決める。「最後まであきらめないことをこの試合で改めて学んだ」と語る。

そして3年生で転機が訪れる。風間八宏監督との出会いだ。監督は日頃から技術はいくらでも追究出来る。どれだけ本気で追求出来るかが大事」と選手に言う。その指導が碓井のサッカーへの姿勢を変える。もっと追究しようと、以前に増してサッカーへ真剣に取り組むようになった。すると、その年チームはインカレ準優勝。自身も大会ベストGKに選ばれた。

本学で得たものに、碓井はチームメイトを挙げる。「蹴球部は学生が主体で運営し、先輩後輩関係なく尊敬し合えるところが素晴らしい」と話す。大学生活を振り返ると「住むなら都会よりつくばのような場所がいい。天久保池で友人と釣りをしたのは良い思い出」と笑う。普段のグラウンドでは見せないマイペースな一面ものぞかせる。

入団するエスパルスはサッカーどころ静岡が本拠地。サポーターの応援も熱い。「シュートを止めるのが自分の武器。大卒なので即戦力の自覚を持ち、早く試合に出て勝利に貢献したい」と力強く語った。（磯野）

悲願の優勝へ導いた主将
「つながり」が支えに

大鷹さおり（バスケ）

「シュウ」、それが彼女のコートネームだ。シューターの「シュウ」、執着心の「シュウ」、集中力の「シュウ」。その全てを兼ね備え、女子バスケットボール部を5年ぶりにインカレ優勝へ導いたキャプテンこそが大鷹さおり（体専4年）だ。

順風満帆なシーズンだったように見えるが、インカレまでは不調だった。春のリーグでも関東リーグでも準優勝。「自分たちの目指すタイトルを逃し、チームのムードがおかしかった」と大鷹は振り返る。そこで支えになったのが、チーム作りのキーワード「つながり」だ。部員同士の「つながり」や練習と試合の「つながり」、プレー一つひとつの「つながり」など、シーズンを通して重要なキーワードとなった。大鷹自身も「チーム全体がつながり、優勝につながった」と語る。

そして、昨年11月29日、5年ぶりのインカレ優勝だ。大鷹は「関東リーグ6連覇の歴史を崩したからには、新しい歴史を作るしかなかった」と当時の心境を語る。例年以上に強いインカレへの思いと、挑戦者なのだという気持ちとが後押しし、自然と練習や試合の雰囲気が良くなった。愛知学泉大との決勝は延長戦だったが、「負ける気がしなかった」と言う。

それまでの不甲斐ない結果、チームのムードもおかしい、そんな困難を乗り越えてのインカレ優勝。「全国優勝は初めて。テンションが上がり最高の気分だった」と大鷹はその時の感激を語る。自身も最優秀選手に選ばれたが、「みんなが支えてくれたからこそ、自分の仕事に専念出来た。自分の力だけではもらえなかった」と周りへの感謝を忘れない。

今春からWJBLのアイシンAWウィングスでプレーすることが決まっている。「経験をたくさん積みたい。でも、今まで身に付けてきたことも生かしていけると思うと抱負を語る。「目標を持てば充実した大学生活になる。目標を持つことが大事」と本学生へエールを送る。「日本一」という目標を持ち、見事にそれを成し遂げた大鷹からの言葉は重い。（牛尾）

チームを活かす司令塔
飛躍を目指し実業団へ

木切倉真一（きりくら）（ハンド）

「背中で引っ張るキャプテン。普段口数は少ないが、時に厳しい発言もする。誰よりもコートを走り、自分がプレーすることでチームをまとめる。男子ハンドボール部を主将として率いてきた木切倉真一（体専4年）は、そういう男だ。

小3の時にハンドを始め、中学生にハンド激戦区の九州から全国大会に出場。大学でも1年生の時から試合に出ている。

木切倉のポジションは、主にセンター。敵味方の位置や動きを確認し、攻撃の司令塔を担う。「ウチはどのポジションからでも点が取れるチーム。相手チームの特徴を考えて、味方の長所を生かすよう心掛けている」と木切倉は、ゲームメーカーとしての戦略を語る。

本学は他大学と比べて、全体的に小柄なチームである。この弱点を速いパス回しからの攻撃と、コンビネーションでカバーしてきた。速いパス回しによって相手ディフェンスのバランスが崩れ、得点のチャンスが生まれる。

木切倉はボールを的確にさばき、味方にシュートチャンスを作る能力が非常に長けている。それは試合中、相手チームが得点力のある選手ではなく、ボールをきばく木切倉に対し、マンツーマンでつくことが何よりの証拠だ。

松木優也コーチ（体育2年）は、「木切倉はプレーに波がない選手で、チームカラーに自分を殺すに溶け込む。キャプテンとしては目配りが出来、口で言わずに背中で見せるタイプ」と評価する。

また彼の最大の強みは、「怪我がないこと」だ。彼はハンドを始めて以来、怪我で試合に出られなかった経験がないという。これについて「良い意味で適当に、いい加減でやっている」と木切倉は話す。自分の身体能力が分かっているからこそ、出来ることだ。

卒業後はトヨタ車体でプレーする。今後の課題は体づくり」だそうだ。木切倉もまた、身長174㌢、体重65㌔と選手の中では小柄である。実業団のフィールドでシュートを打つには、今よりもがっしりとした体格にならなければならない。木切倉は「増量も大事だが、体重が増えても今のプレーとスピードを生かす方が大事だと思っている」と語る。

早ければ今春のリーグ戦でのデビューが期待される木切倉。寡黙な九州男児の実業団での活躍に今後も目が離せない。（雪丸）

辛くてもあきらめない心
指導者として伝えたい

鈴木愛梨（剣道）

「剣道をすればお母さんたちの学費が食べられると思っていた」と山形出身の鈴木愛梨（体専4年）は剣を取ったきっかけを話す。主将として責任を果たした。昨年5月に行われた関東女子学生剣道選手権大会で優勝し、本学生が3連覇という快挙を達成した。

鈴木が剣道を始めたのは小学2年生の時。父と兄が剣道をしていた。道場の食事会で出る手羽を目当てに剣の道に入った。「勝つのが楽しかった」と振り返る。

高校生で個人優勝を経験。憧れの先輩、佐久間陽子（08年度体専卒）を追うように本学に入学。「練習はきつく、先輩も厳しく辞めたくなったと話す一方、「自分から剣道を取ったら何も残らない」と負けず嫌いな一面ものぞかせる。

2年生の時、中堅として出場した全日本女子学生剣道優勝大会。決勝戦で足元をすくわれ、準優勝に終わった。「佐久間先輩始め、先輩方の最後の試合だった。それからはどんな試合も負けるのでは、と怖かった」と語る。

試合への恐怖をひきずったまま1年が過ぎた。3年生でも中堅として、同大会に出場した。「もう思い切りやってしまおう」と気持ちを入れ替えた。自身の結果は2勝4分だったが、本学は5年ぶりの優勝。「そこから自分のペースを取り戻せた」と笑顔を見せる。

今年は怪我に悩まされた剣道選手権大会も左アキレス腱の部分断裂を抱えながら試合に臨んだ。「跳べないし、けれない。でも、自分の出来ることをしようと思った」とあきらめずにつかん優勝だった。

剣道から得たものは、感謝の心。卒業後は地元山形で教員として働く。「やれば出来るということを私もあきらめず教えていきたい」と目を輝かせる。（光安）

旅立つアスリート

力強くチーム引っ張る けがで心身共に成長

皆本明日香（バレー）

「苦しいこともあったが、4年間バレーボールを続けてきて良かった。支えてくれた周囲の人達に感謝したい」女子バレーボール部主将の皆本明日香（体専4年）は4年間をこう語る。エースでレフトとしてチームをリードし、昨年の全日本インカレで6年ぶり6度目の優勝という快挙を成し遂げた皆本が、今春新たなスタートラインに立つ。

皆本の持ち味はジャンプ力を生かしたスパイクだ。中西康己監督（体育・准教授）は「チームを力強いプレーで引っ張り、思い切りもいい。スパイクだけでなく、相手のコースを読んだブロックにも秀でている」と評価する。

高校時代から全日本バレーボール大学選抜・高校選抜男女東西対抗戦や全国高等学校バレーボール選抜優勝大会などで頭角を現してきた。東西対抗戦では2回の優勝経験も持つ。入学後も女子バレー部に入部したが、2年生の秋に転機が訪れた。左ひざ前十字靭帯断裂という故障のため、約1年間コートから離れざるを得なくなったのだ。2年生になり、ようやく自分のプレーが出来てきたと波に乗るころだっただけに、ショックも大きかった。しかし、このブランクが後の躍進につながった。

体を一から作り直した結果、負傷前に比べてジャンプ力が上がり、筋力がついた。そして何より、コートでは分からなかった、外からチームを支えることの大切さに気がついた。「けがをすることで見えてくるものもたくさんあり、新しい考え方が出来るようになった。今ではけがをして良かった」と振り返る。

ブランクを経てチームに復帰し、主将となった皆本は「レフトで主将という仕事をしっかりと果たすと共に、確実に点を取り、自分のプレーをすることでチームを引っ張ろうと考えていた」と主将としての自身の立場を語った。

卒業後は上尾メディックス（埼玉県）でプレーする。目標とする選手については「考えたことがなかった」と苦笑するが「スパイク、レシーブ、サーブ全てに秀で、自分のプレーで信頼される選手になりたい」ときっぱり。その姿に、日本の未来のエースとしての可能性を見た。（根津）

トラックに立つと別の顔 仲間の存在が意識変える

齋藤仁志（陸上）

アジア選手権200㍍第3位、インカレ3連覇。昨年6月の日本選手権では20秒42の自己新記録を叩き出す。まだまだ伸び盛りの齋藤仁志（体専4年）が今年で桐の葉のユニフォームを脱ぎ、次のステップに進む。

意外にも高校時代はまだ頭角を現しておらず、高校で陸上は最後にしようと考えていた。卒業後は教育学部を志望していたが、たまたま出場した大会で全日本ジュニアの標準記録を突破。そのまま日本ジュニア陸上選手権大会で優勝を成し遂げた。「もし、あの大会に出場していなかったら、教師を目指していた」と振り返る。

練習では、自分の体調を考え、余計な練習をしないよう心掛けた。メニューを減らすことはあっても、増やしはしない。はにかみながら「あまり練習は好きではないんです」と言うが、一度競技場に入ると表情は真剣そのもの。近寄りがたいオーラを醸し出す。その結果、3年生までは大きなけがもなく記録を伸ばし、その年の12月には主将となり、チームの顔になった。

だが、春先の大会に向け調整をする3月にけがをする。調子が上がらず、出遅れた。そのような中、「チームの支えを一番に感じる事が出来た」と思い返す。

主将になった当初は言わばエゴイストで、自分が速くなることにしか興味がなかった。だが、苦しい時の仲間の存在で意識が変わった。特に一番の思い出は昨年5月の関東インカレでのアベック優勝だ。「個人的な結果よりも、史上初となるアベック優勝を成し遂げたことを、誇らしく思う」と語る。

海外の大会にも出場する齋藤。健康に気を使っていると思いきや意外にも「ポテトチップスも炭酸ジュースも普通に好きです」と笑顔で答える。

大学卒業後は実業団で、陸上を続ける。「今までは日本代表に選ばれたことで、満足してしまっていた。今後は結果を残さなくては」と目線はさらなる高みをとらえている。（鳥本）

HELLO! 先端科学

メロディモーフィング 次世代に楽しさを提案 iPhoneで簡単に

ピアノを弾くにしろ、歌を歌うにしろ、私達はそのメロディやリズムといった情報を楽譜から得ている。音楽理論という視点から楽譜を見た時、それは単に音楽を奏でるための道具から、立派な研究対象となる。

このような研究分野は「音楽情報処理」と呼ばれ、この分野の研究事例の一つに「メロディモーフィング」という技術がある。本学の濱中雅俊講師（知機）らのグループが開発した、「メロディ」そのものを滑らかに変化させる手法だ。

「メロディモーフィング」は、音楽理論GTTMに基づく、楽曲分析の結果として得られる楽曲構造木（タイムスパン木）を用いることで実現した。構造木とは、あるメロディを成す1つ1つの音が、そのメロディの本質どのくらい結びついているか、音の重要度を構造的に示したものだ（図1）。

根本に近い枝に接続されている音符ほど、そのメロディにおいて本質的な音であり、末端に近い枝に接続されている音符ほど装飾的な音である。

メロディモーフィングでは、まず、2つのメロディA、Bの構造木を求め、その共通部分だけを取り出す。次に共通部分とメロディA、共通部分とメロディBの間の特徴を持つメロディC、メロディDを導く。最後にメロディCとメロディDの構造木が重なるように足し合わせ、メロディEを作成する（図2）。

メロディCとメロディDは、その構造木の枝葉を何本消去するかによって、数通りのメロディが出来る。つまりメロディCとメロディDを足して出来るメロディEは、それぞれの特徴を含む度合いによって、何通りものメロディに変化する。この時、メロディEはメロディAとメロディBの間を、滑らかに変化させることが出来る。

この技術を用いて生まれたのが、iPhone・iTouch用アプリケーション「Shake Guitar」だ（本紙281号に関連記事）。iPhoneを振ることでメロディを調整、実際にギターを演奏しているような感覚を味わえる。

他にもメロディモーフィングを使えば、初心者でも簡単に多様なメロディの作成が出来るようになる。例えばコンピュータに「メロディAのニュアンスをメロディBに3割付加せよ」という指示を出せば、譜面に音符を書かずとも、メロディを作れる。

濱中講師は「音楽情報処理のみを専門として研究室は世界でも例が少なく、未開拓の研究がたくさんある。今後それらの研究に取り組みながら、この分野の研究者を多く輩出していきたい」と展望を語る。

コンピュータを使って音楽を理解する、「音楽情報処理」という新しい研究分野から生まれたメロディモーフィング。それは私たちに、次世代型の音楽の楽しみ方を提供する鍵となる可能性を秘めている。（本紙・雪丸千彩子＝人文学類）

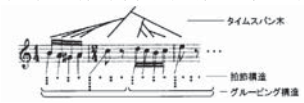


図1：グルーピング構造，拍節構造，タイムスパン木

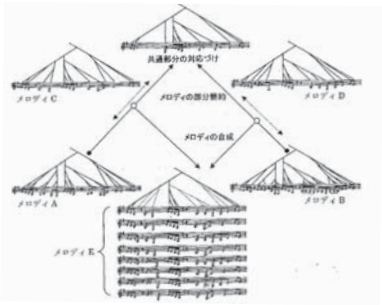


図2：メロディモーフィングの概要

旅立つ先輩からの手紙

音楽療法士

（淑徳大学教授）

高橋多喜子さん

日々の努力が道拓く

ひょんなことから、筑波大学大学院で勉強することになり、そのことで音楽療法の道が開拓できたと思っています。音楽療法とは一言でいえば、音楽による心理療法です。言葉では表現できない何か、言葉を超える何かをクライエントと共有し、そのことでクライエントが成長し、また自己治癒力が増進する。またはクライエントのQOL（生活の質）が向上するというのが音楽療法と言えます。

音大卒業後、知らない間に貯まっていた多くの心理学の本を眺めて「私は勉強したいらしい」と気づき、長女が中学に入ったのを機に障害児教育という新しい分野に飛び込みました。それは心理、社会福祉、教育、医療を包括する音楽療法へ繋がる道となりました。

大学院の生活は、音楽学研究をさっさと插て結婚し、つくばに来た私にとっては新鮮な驚きで一杯でした。週ごとに提出されるレポートにまいがつつも体力作りに始めたテニスをよく練習したものです。サークルがいくつもあって、大学内のあちこちのテニスコートで楽しみました。この時つけた体力のお陰で今の忙しさを乗り切っているようにも思います。

大学院修了後は、音楽療法士養成する学校に勤務する傍ら、認知症高齢者、障がい児、統合失調症患者などを対象に臨床活動に明け暮れる日々でした。そして「働きながら学位を論博で取ること」を半ばライフワークとし、乗りかけた船を下りることもできず、進んでいるのか戻っているのか、わからない日々を過ごしつつようやく手にした「博士号」でした。現職は3年前からで、小学校教員を養成するコースにいますが、研究、教育、臨床のバランスをうまく取っていきたいと考えています。発達障害の子どもたちをいかに教育に導くのか「療法的音楽教育」の分野も開拓していくつもりです。しかし当面の課題は「認知症予防の音楽療法効果」の基礎研究の仕上げでしょう。

人生はすごく長いと考えていると思います。卒業してからが長いのです。何度でもやり直しが出来ると思います。そして日々の努力が勝ります。皆様のご活躍をお祈り致しております。

（平成6年度、教育研究科修了）

全日本インカレ
女子　6年ぶり6回目の優勝

決勝では嘉悦大を圧倒
3年前の雪辱果たす

バレー

大学バレーボールの最高峰を決める全日本インカレが、昨年11月30日―12月6日にかけ東京体育館（東京・渋谷区）などで開催された。本学女子は6年ぶり6回目の優勝に輝いた。本学男子はベスト8に終わった。

2回戦から登場した本学女子は順調に勝ち上がり、準決勝戦では京都橘大にストレート勝ちして決勝進出を決めた。

決勝戦の相手は、一昨年の決勝、昨年の3位決定戦で敗れた嘉悦大。昨年の秋季関東大学バレーボール1部リーグ戦では、勝利したものの2セットを落とすなど苦しめられてきた相手だ。第1セット、嘉悦大に20―20と詰め寄られる中、ピンチサーバーの小林萌子（体専4年）が相手の攻撃を崩して1点を取り、流れを引き戻した。反撃を受けるも、レフトの野末夏子（同2年）がライトのスパイクをブロック、その後も好プレーが続き、まずは第1セットを25―21で奪った。

続く第2セットからは、主将皆本明日香（同4年）のプレーが光った。第1セットでは動きに緊張があったものの、本セットでは時間差攻撃が決まってからは思い切ったプレーが続いた。皆本の活躍もあり、25―18と大差で第2セットも奪った。

チームメイトから胴上げされる皆本

迎えた第3セット、序盤は両者譲らない試合運びとなったが、皆本の攻撃や渡邊美穂（同3年）のトスがさえて嘉悦大の攻撃を抑え、25―21と第3セットも奪った。その結果、嘉悦大を3―0とストレートで下して優勝を決めた。

女子バレーボール部の中西康己監督（体育・准教授）は「4年生の実力はもちろんだが、リベロ、セッターといった3年生の成長が優勝に大きく貢献した。今回、ディフェンス力が結果に結びついたので、来年以降もさえて嘉悦大の攻撃を抑え大切にしていき連覇を目指したい」と語った。

個人賞は以下の通り。最優秀選手賞＝皆本明日香▽ベストスコアラー賞＝皆本明日香▽サーブ賞＝樋口美紀（体専4年）▽セッター賞＝渡邊美穂▽リベロ賞＝岩永麻里江（同3年）▽優勝監督賞＝中西康己

◇

全国の強豪が東西に分かれて対戦する全日本バレーボール大学選抜・高校選抜男女東西対抗戦2009が、昨年12月12、13日に駒沢オリンピック公園総合運動場屋内球技場（東京・世田谷区）で開催された。本学からは皆本明日香が東軍主将に選抜されたほか、樋口美紀、岩永麻里江、渡邊美穂が出場した。試合の結果、東軍が1日目、2日目ともに3セットを先取して優勝した。

個人賞は以下の通り。最優秀選手賞＝皆本明日香▽スパイク賞＝樋口美紀▽ブロック賞＝皆本明日香▽サーブ賞＝渡邊美穂▽セッター賞＝渡邊美穂▽リベロ賞＝岩永麻里江

全日本総合

男子ベスト8入り
実業団に惜敗

ハンド

第61回全日本総合ハンドボール選手権大会が、昨年12月16―20日、駒沢オリンピック公園総合運動場体育館（東京・世田谷区）で開催された。本大会には実業団、学生、クラブチームの各予選を勝ち抜いた計16チームが出場し、日本一を争った。本学男子は2回戦でトヨタ紡績九州レッドルネードに敗れ、ベスト8となった。

17日に行われたトヨタ紡績九州との一戦。本学はカットインやサイドへボールを展開することで、トヨタ紡績のディフェンスを突破。前半9分には6―2と4点リードする。しかしトヨタ紡績も3連続得点するなど反撃し、13分には7―7の同点に。その後も両者譲らず、14―13と本学の1点リードで前半を終えた。

後半、本学はスカイプレーなどの好プレーで点を重ねるが、トヨタ紡績も確実に点を取り返す。15分に佐藤秀吾（体専3年）らが4連続得点し、一気に突き放すかに見えたが、トヨタ紡績がその後、6連続得点。本学も粘ったものの、32―31で惜敗した。

舟木浩斗コーチ（研究生）は「卒論提出前で、4年生はトレーニングが出来ていない中、頑張った。ディフェンス、オフェンス共によく動けていた」と語った。

関東大学対抗戦
日体大に大差つけ勝利
過去5年で最高の成績

ラグビー

関東大学対抗戦の最終戦となる日本体育大学との試合が昨年12月5日、秩父宮ラグビー場（東京・港区）で行われた。

試合は序盤から本学ペース。開始5分で先制すると、前半20分までに3トライを奪い大差をつけた。29―10で折り返し後半に入っても、本学の勢いは止まらず、56―22で勝利した。この勝利で今期対抗戦の成績は5勝2敗となり、順位は過去5年で最高の3位となった。

◇

第46回全国大学ラグビーフットボール選手権大会が昨年12月20日―1月10日にかけて国立競技場（東京・新宿区）などで行われた。

本学は1回戦、秩父宮ラグビー場で東海大と激突。前半は優勝候補の東海大が本学のミスをつくなどして3―12で折り返す。

後半も東海大の勢いは衰えず、13分までに8―22と点差を広げられる。しかし彦坂圭克（体専1年）が攻め込んで23分にトライを奪うと、38分には双子の兄である彦坂匡克（同）もトライを決め、大野亮（体専4年）が残り15秒でコンバージョンキックを決め同点に追いつく。しかし、ロスタイム中は東海大の猛攻に耐える展開となり、10回以上攻める東海大を押し返すも、最後は力尽きた。試合後選手たちに、会場の観客から総立ちで拍手が送られた。

古川拓生監督（体育・講師）は、「攻守にわたり、1年生が活躍した年だった。しっかりディフェンスが持ち味なので、新チームでもディフェンスを磨いていきたい」と語った。

2009年度
体育会賞

【体操部】江塚和哉（体専4年）第14回全日本ラート競技選手権大会　優勝　全日本学生ラート競技選手権大会　男子総合　直転　斜転　優勝／三宅麻衣子（体専3年）全日本学生ラート競技選手権大会　斜転　跳躍　優勝／江塚和哉（体専4年）榊原厚一（地球2年）吉永直嗣（工シス4年）三宅麻衣子（体専3年）全日本学生ラート競技選手権大会　団体　優勝／田村元延（体育1年）全日本ラート選手権大会　個人総合　跳躍　優勝／諏訪部和也（体専4年）スズキシャパンカップ2009第26回全日本エアロビック選手権大会　シングル部門　ペア部門　優勝【陸上競技部】前田和香（体専1年）2009年日本学生陸上競技選手権大会　三段飛び　優勝　日本学生陸上競技校選手権大会　三段飛び　優勝　日本学生陸上競技個人選手権大会　砲丸投げ　優勝　日本学生陸上競技対校選手権大会　砲丸投げ　優勝／蛭田伶奈（体専3年）2009年日本学生陸上競技個人選手権大会　円盤投げ　優勝／竹原史恵（体専4年）日本学生陸上競技対校選手権大会　七種競技　優勝／齋藤上志（体専4年）日本学生陸上競技対校選手権大会　200㍍　優勝／佐藤慧太郎（体専1年）田中暢人（体専3年）日本学生陸上競技対校選手権大会　4×400㍍リレー　優勝／塚祐輔（体専4年）第25回ユニバーシアード競技大会　4×400㍍リレー　3位　国際グランプリ陸上大阪大会2009　4×400㍍リレー　優勝／陸上競技部女子　日本学生陸上競技対校選手権大会　総合優勝／安孫子充裕（体専3年）国際グランプリ陸上大阪大会2009　4×400㍍リレー　優勝／大室秀樹（体専1年）日本ジュニアユース陸上競技選手権大会　110㍍H　優勝／中野瞳（体専1年）日本ジュニアユース陸上競技選手権大会　走幅跳　優勝／柴奏子（体専1年）日本ジュニアユース陸上競技選手権大会　槍投げ　優勝【オリエンテーリング】常住沙織（比文4年）2009年度日本学生オリエンテーリング選手権大会　WE　優勝【女子サッカー部】筏井りさ（体専3年）第25回ユニバーシアード競技大会　2位【サイクリング部】吉井玲香（芸専2年）全日本マウンテンサイクリング一h乗鞍大会　一般女子の部　優勝　ツールドつくば　女子の部　優勝　第3回全日本実業団ひぴそ高原ヒルクライムロードレース　FRの部　優勝【剣道部】西村英浩（体専3年）第57回全日本学生剣道選手権大会　男子個人　優勝／女子団体　第28回全日本女子学生剣道優勝大会　優勝／緒方亜香里（体専1年）第25回ユニバーシアード競技大会　男子団体　3位／小寺将史（体専1年）全日本ジュニア選手権大会　男子66㌔級　優勝／平成21年度講道館杯全日本柔道体重別選手権大会　女子78㌔級　優勝　全日本ジュニア選手権大会　男子66㌔級　優勝／西山大希（体専1年）世界ジュニア柔道選手権大会　男子90㌔級　3位　全日本ジュニア選手権大会　優勝／山本小百合（体専1年）世界ジュニア柔道選手権大会　女子63㌔級　優勝　全日本ジュニア選手権大会　優勝／小倉武蔵（体専2年）全日本学生柔道体重別選手権大会　男子66㌔級　優勝／田中康介（体専3年）全日本学生柔道体重別選手権大会　男子81㌔級　優勝／牧志津香（体専2年）全日本学生柔道体重別選手権大会　女子57㌔級　優勝／伊部尚子（体専4年）グランプリ青島大会　女子48㌔級　優勝／女子団体　全日本柔道女子選抜体重別団体優勝大会　優勝【女子ハンドボール部】平成20年度高松宮記念杯全日本学生ハンドボール選手権大会　優勝【水泳部】岡本優（体専3年）日本学生選手権水泳競技大会（飛込）男子高飛び込み　優勝／水泳部飛込　日本学生選手権水泳競技大会（飛込）男子団体　優勝【女子バスケットボール部】第61回全日本大学バスケットボール選手権大会　優勝

今年度も本学の体育会は、優秀な成績を収めた。その活躍は目覚ましいものがあった。今年度の彼らの業績をたたえる体育会賞が発表された。来年度も彼らの活躍が期待される。

全日本学生ダンス選手権大会

栗栖・小畑組が優勝
本学生の活躍目立つ

栗栖・小畑組のワルツ（撮影・奇藤太一）

昨年12月6日に駒沢オリンピック公園総合運動場体育館（東京・世田谷区）で行われた第54回全日本学生ダンス選手権大会で、本学舞踏研究会が団体7位の成績を収めた。

このうち、栗栖和丸（人間4年）・小畑魅空（国総4年）組がワルツの部で優勝した。同組は、昨年7月に行われた第47回全日本学生選抜競技ダンス選手権大会でもモダンの部で優勝している。

本大会は、モダン部門4種目とラテン部門4種目の計8種目のうち、各大学から1種目につき1組を代表として選抜し行われた。4年生にとっては最後の大会であった。

栗栖・小畑組は、大会でスウィングが大きく優雅でダイナミックなワルツを披露した。優勝したカップルのみによるオナーダンスでは、ディズニーの映画「美女と野獣」のメインテーマの編曲に合わせて踊った。

2人は2007年の9月からペアを組み練習を重ねてきた。栗栖さんは「本当にうれしい。後輩にも、競技ダンスで勝つ楽しさをどんどん味わってほしい」と喜びを語った。小畑さんは「夏の大会のときよりもプレッシャーや緊張感が大きかった。優勝は夢だったが、なかなか実感がわかなかった」と感激の面持ちで話した。

本大会ではこのほかにも、水瀬里梨沙（芸専4年）が、モダン部門、ラテン部門で最も注目されたパートナー各一人ずつに贈られるボールルームクイーン賞モダンの部を受賞し、村岡慧（自然4年）が東部推奨選手として他大学のパートナーとペアを組んで決勝に進出し、5位に入賞した。

柔道グランドスラム東京大会

優勝3人を含む7人が入賞

緒方、決勝も一本で制す
OB・OGも活躍

柔道

柔道グランドスラム東京大会が昨年12月11日から13日にかけて東京体育館（東京・渋谷区）で開催された。この大会は昨年まで嘉納杯柔道ワールドグランプリと呼ばれていた。本学からは10人が出場し、福見友子（体育2年）が48キロ級、小野卓志（同1年）が90キロ級、緒方亜香里（体専1年）が78キロ級で優勝。粟野靖浩（同3年）が73キロ級、西山大希（同1年）が90キロ級で2位。森下純平（同）が66キロ級、山本小百合（同）が63キロ級で3位入賞を果たした。また多数のOB、OGが出場し優秀な成績を収めた。

福見の決勝の相手は近藤香（帝京大）。準決勝で福見のライバル山岸絵美（三井住友海上火災保険）を破り波に乗っていた。序盤は決め手を欠く展開。残り時間3分48秒、守りに回っていた相手に指導が与えられた。その後は相手に隙を与えず、福見は豪んに投げ技を仕掛け、終始相手を寄せつけず優勝を果たした。

福見は「世界選手権が終わって初めての試合。今までの経験を生かして、こういう形が結果として出てよかった」と今大会を振り返った。

90キロ級の決勝は小野と西山の先輩後輩同士の試合となった。小野は世界規模の大会で優勝したことのある実力者。西山も本大会一回戦で8月の世界柔道の金メダリストを破るなど調子が良かった。序盤は互いに激しい組み手と足技で応酬。先輩の小野が試合を有利に進め優勢勝ち。先輩としての意地を見せた。

優勝した小野は「自分はもうベテラン。追いかけてくる後輩はたくさんいる。今年1年、生き残っていくためにはどんな内容でも勝たねば」と話した。惜しくも優勝を逃した西山は「敗れたのは相手の組み手が自分より早かったから。オリンピックに向けて次に対戦した時は絶対勝ちたい」とリベンジを誓った。

78キロ級は長年この階級を引っ張ってきた中澤さえ（綜合警備保障）が昨年11月に引退。誰が新女王になるか注目されたが、世界ジュニア、講道館杯を制し波に乗る緒方が優勝した。緒方は、2回戦以降は全て一本勝ち、決勝に駒を進めた。

決勝の相手は穴井さやか（ミキハウス）。1カ月前の講道館杯でも対戦した相手。残り2分49秒に一瞬のすきを突かれて2つ目の有効をとられ、相手に大きくリードされた。その後は一転して攻めにまわり、相手が足技を仕掛けてきた所を寝技に持ち込み横四方固めで一本勝ち。逆転技で優勝を果たした。

大事な大会を制した緒方は「立ち技では相手の方が上手いので自分の得意な寝技に持ち込むチャンスを狙っていた。これからも出場する大会は確実にものにしなければ」と感想を述べた。

73キロ級の粟野は準決勝まで全て一本勝ちで進み、決勝では世界ランク1位の韓国の選手と対戦した。序盤は果敢に攻め込み、試合を有利に展開したが、試合開始1分30秒頃、相手に腕を取られ一本負け。惜しくも2位に終わった。

粟野は「相手は昨年の嘉納杯と同じ相手。雪辱を果たしたかったが、今年も地力の差で負けてしまった」と語った。

増地克一監督（体育・講師）は「福見は直前の調子は良くなかったが、危なげない試合展開で相手を寄せ付けなかった。小野は終始攻めの柔道に徹したのが良かった。緒方は自信に満ち溢れている。これからライバル対策をしっかりやってほしい。そのほかの選手も全体的によくやってくれた」と今大会を振り返った。

◇

柔道ワールドマスターズ2010が1月16、17日に韓国のスウォンで開催された。この大会は世界ランク16位までの選手が出場でき、世界選手権に次ぐ大会と位置付けられる。

本学からは小野卓志（体育1年）、福見友子（同2年）、伊部尚子（体専4年）、緒方亜香里（同1年）ら4人が出場し、小野が90キロ級で優勝、福見、伊部が48キロ級で3位に入った。

小野は準決勝まで一本勝ちを重ね、決勝では世界ランク2位のデニソフ（ロシア）と対戦した。決勝は双方とも一歩も譲らず、延長戦に突入した。小野は開始直後から果敢に攻め、内股が決まり優勝勝ちした。

小野は「お互いに技の掛合いでどちらに勝ちが転ぶか分からなかった。最後は気持ちで勝負した」と語った。

福見友子

小野卓志

緒方亜香里

第7回全日本大学女子選抜駅伝競争

学連選抜から川鍋が第4区を力走
佛教大、大会新で初優勝

陸上

第7回全日本大学女子選抜駅伝競走が昨年12月23日に行われた。本大会はつくば中央公園をスタートとし、本学陸上競技場をゴールに迎える。全区間30・67キロを6人で襷（たすき）をつなぐ。

注目は過去6回すべてを優勝で飾った立命館大だ。しかし、今回は惜しくも2位。そして1位の表彰台に上ったのは佛教大だ。10月に仙台で行われた駅伝大会でも、6区間中5区間で区間記録をマークする完勝であった。今回も、2区間で区間記録を叩き出し、大会新となる1時間37分35秒で優勝した。

また、本学からは川鍋彩（体専3年）が関東学連選抜として出場し、第4区を12分30秒で完走した。

襷を渡し終えた後、川鍋は「今回は調整不足、不甲斐ない走りとなったことを申し訳ない思う」と無念そうに語る。また、「全国で戦うには、まだ筑波のレベルでは勝ち残れない。まずは個人のレベルを上げなくては」と述べた。

優勝した佛教大学のアンカー西原加純

第55回関東学生剣道新人戦大会

男子 惜しくも準優勝
女子 4回戦で姿消す

剣道

第55回関東学生剣道新人戦大会が昨年11月22日、東京武道館（東京・足立区）で開催された。87校が出場し、本学は準優勝を果たした。

3回戦では早稲田大学と対戦。1―1のまま代表者戦に突入した。大将の村上雷多（体専2年）は押され気味だったが、開始2分、相手の手元が開いた瞬間に飛び込み、小手を取った。

準々決勝で東海大学を3―1で下すと、準決勝では國士舘大学と対戦。昨年度準決勝で惜敗した強豪校だったが、3―1で勝利し、決勝戦駒を進めた。

決勝戦の相手は日本体育大学。本学は序盤に2本を先取されたが、三将の神田智浩（体専2年）が小手で一本を決めると試合は接戦に。しかしその後は副将、大将とも引き分けに終わり、1―2の戦績で敗れた。

試合を振り返って村上は、「國士舘大には一度も勝っていなかったので、新チームで勝ちたいと思っていた。決勝戦では、前の仲間がないでくれたのに自分が取れなくて申し訳なかった」と話した。また、「これからも日本一目指して取り組みたい」と語った。

鍋山隆弘監督（体育・講師）は「力以上の結果を出せた。特に強豪の國士舘大に勝てたのは良かった。決勝では前半に取られすぎたのが敗因だった」と語った。

◇

第10回関東女子学生剣道新人戦大会が昨年11月21日、東京武道館（東京・足立区）で開催された。70校が出場し、本学は4回戦まで進んだものの、準決勝進出を逃した。

本学は故障者が多かったが、1回戦では茨城大を4―0で下すなど、4回戦まで順調に駒を進めた。駒澤大学との4回戦では、初戦に一本を取られ、好調の里井茜（体専1年）も引き分けに終わり、流れをつかまれたまま0―2で敗れた。

有田祐二監督（体育・講師）は、「選手たちは勝つ気で戦ったと思うが、油断してしまった。今は練り鍛える季節なので、2年3年でまとまって良い方向へ進んでほしい」と語った。

第21回全国日置流弓道大会

女子、団体で優勝果たす
個人戦でも多数入賞

弓道

本学体育会弓道部主催の第21回全国日置流弓道大会が本学弓道場で昨年12月19日に開催された。本大会は日置流の大会で、この流派に関わる大学や一般の射手が数多く集まった。

本学からも多くの選手が出場した。団体戦では男子2団体、女子1団体が決勝トーナメントへ進出し、女子団体で筑波Eが優勝を果たした。筑波Eで活躍した湯山可奈子（生資2年）は「強豪校も多く、多数の選手が参加した中で優勝出来、とてもうれしい」と語った。

個人では、男子で神野皓平（応理1年）が準優勝、明日山聡（心理2年）が7位、笹谷大（物理3年）が9位、女子で白石唯（体育3年）が準優勝、上田理奈（同）が8位の成績をそれぞれ収めた。

顔

柔道の虜、世界に羽ばたく

昨年12月に行われた柔道グランドスラム東京大会女子78キロ級決勝。相手が2つの有効を奪い大きくリード、残り時間はわずか。しかし緒方亜香里（体専1年）は冷静だった。寝技に絶対の自信を持っていたからだ。「相手のスタミナが切れた時こそ好機」。そう考え相手のすきを伺っていた。

緒方の予想通り相手は疲れ始め徐々に技が決まり出し、残り1分で寝技に持ち込むことに成功。その後は相手を抑え込み横四方固めで一本。鮮やかな逆転勝ちを果たした。

緒方が自分にとって一番大事な時期だったと振り返るのは高校時代。柔道部の監督に「お前は絶対、日本一になれる」と言われ続けた。監督は既にパワーとスタミナを兼ね備えていた緒方の素質を見抜いていたのだ。「最初は信じられなかった。少しずつ自信もついてきたし、またそうならねばならないと思うようになった」と振り返る。

そんな気持ちと裏腹に、1、2年生のころは試合の度に負け続けた。高校は寮生活、柔道漬けの毎日。なかなか結果に結び付かなかったが、緒方は自分にとって一番大事な時期だったと振り返る。空手も全国優勝するほどの腕前があり、中学入学後も空手を続けるか迷っていたという。そんな時、兄から借りて手に取ったのはある柔道漫画。それがあまりにも面白く、中学入学後柔道部に入部した。

78キロ級の新女王
緒方亜香里（体専1年）

持ち前のプラス思考を武器に、次は絶対勝つという思いで、毎日夜遅くまで練習を重ねた。

転機が訪れたのは2年生の時。地元九州で開かれた地方大会の団体戦決勝で、チームの勝ち負けが決まる重要な一戦に臨んだ。それまで緒方は団体戦で負け続け、自信を失いかけていた。しかし彼女はその試合で見事勝利。それほど大きな大会ではなかったが、自分の力でチームを優勝に導いたこの一勝で緒方は大きな自信をつけた。

高校卒業後は男女合同の柔道部を持つ本学に進学。男子とも練習を重ねさらに技を磨いた。世界ジュニア、講道館杯で見事優勝を果たした。

「小学校のころは空手をやっていたんですよ」と振り返る。空手も高校時代に比べれば自由な時間が多い。「その分誘惑も多いので気をつけたい」と笑う。

現在の目標は今年8月に東京で開かれる世界選手権への出場だ。そして2年後のオリンピックの出場につなげたい。「自分は小細工を使わない。真っすぐな柔道を貫きたい」そう語る彼女は既に世界を見据えている。（本紙・加藤茂行＝地球学類）

世界の教室から

生活から見えてくる人間味

サンクトペテルブルグ大学（ロシア）
栗山　修治

今年の4月から、ロシア第2の都市サンクトペテルブルグへ語学留学をしています。多くの世界遺産を抱えた、街並みの美しい場所です。

渡航前、ロシアに対して閉鎖的なイメージを持っていましたが、意外と海外企業の進出が目立ち「スシ・バー」という日本の寿司（味付けは若干ロシア風ですが）が食べられる店などかなりもたくさん見かけます。英語はまだろくに通じないものの、「ロシアは思ったよりも国際化している」というのが第一印象でした。

ですがこの国では、率直に言って苦労が絶えません。中でも、労働者の体質にはショックを受けました。大学や寮のスタッフでさえ、締め切りを守らなかったり、予告無しに休みを取ったりは当たり前。おかげで生活に響きかねないトラブルをいくら被ったことか……。また、どこへ出かけても店員は無愛想だし言葉遣いも何だかイマイチで、この国の人々は余程働くのが嫌いなのだろうなと正直思いました。

しかし一方で、ロシア人には良い意味でも人間臭さを感じます。例えば、バスでお年寄りに声を掛けて席を譲るといったことは日本よりも頻繁に行われていますし、中年の女性が席に着きっ放しの若者を注意する、という場面さえ何度も目にしました（僕自身も注意されました……）。こういう所は、他人に無関心なありがちな日本人との大きな違いだと思います。怖そうに見える人が多いですが、ひとたび道を尋ねたりすれば、懇切丁寧にお教えてくれたりと、誠実に対応してくれます。ちなみに、先述の苦労も相まって、人の親切が身に染みるようになりました。大きな収穫かもしれません。

仲間たちと一緒に（右から3人目が栗山さん）

肝心の勉強については、まず授業がとても楽しいです。これは全てロシア語で行われていますが、ユニークな先生方の授業には毎回引き込まれます。おかげで勉強へのモチベーションが維持でき、ロシア語力もそれなりに伸ばせた気がします。現在のクラスには中国、韓国、台湾、ベルギー、ハンガリー、トルコなどの留学生がおり、ロシア人以外との交流の機会にも恵まれています。

そんなこんなで、留学期間も残りわずかとなりましたが、こちらで行われるロシア語検定への合格を目標に、今後も有意義に過ごしていきたいと思います。（比文3年）

筑波山ルネッサンス

地方での起業について講演

ふるさと回帰の意義を語る

地域再生の必要性について語る川辺教授

人文社会科学研究科・社会貢献プロジェクト主催の筑波山ルネッサンス講演シリーズ「日本の未来と地域再生」の第2回講演が、先月22日1C201教室で行われた。本講演は筑波山を中心とする文化資源再生プロジェクトの一環として、全4回が予定されている。

今回のテーマは「地域再生の現状と課題」。講師に事業創造大学院大学の川辺紘一教授を招き、教授らが取り組んでいる「ふるさと起業塾」のプロジェクト例を元に、地域再生の現状と課題について講演した。

「ふるさと起業塾」では、主に20－30代をターゲットに、地方で起業するための方法論や事例、課題について講演会を行っている。

また地方公共団体やNPO団体と協力して、若者や退職者が、田舎で数カ月間農業体験などをする取り組みをあっせんしている。そのうちの1つが、昨年10－12月に熊本県天草市で実施された「天草アグリビジネス企業塾」だ。派遣切りに合った女性や定年を迎えた男性ら、15人が参加。農業や石窯作りを体験した。塾終了後、生活の拠点を天草に移した人も居る。

世論調査によると、シニア世代や若者世代の間で田舎暮らしへの願望が高まっているという。また10万人を対象としたアンケート調査から「田舎の起業家に投資環境が整っていれば投資してみたい」という意欲的な投資家が全体の3割を占めることが分かっている。

人々の関心が田舎に集まっている今、地域再生の必要性について川辺教授は、「そもそも都市の繁栄は永久に続くのか、という疑問がある。地域には活用出来る資源が残っており、それを生かしていく取り組みが必要だ」と述べた。

講演会に参加した岩谷理美さん（社学3年）は、「先生の『ふるさとはある種のイデオロギーである』という言葉が印象的だった。自分の研究の良いヒントになった」と話した。

第3回目は今月19日に同

宿舎入居抽選

男子の倍率が上昇

改修工事の影響か

在学生を対象とした平砂、追越、一矢の一般単身用個室の入居抽選が、昨年12月3、4日に平砂共用棟娯楽室で行われた。昨年よりも男子の倍率が大幅に上がり、4・31倍（前年比1・63倍）であった。女子は3・96倍（同0・90倍）で、ほぼ変動はみられなかった。

つくば地区は改修工事に伴い居室数が減っている。また、今年は2人部屋の募集を行わなかったため、一般単身の入居希望者が増え、倍率が上がったとみられる。全体の入居希望者数に大きな変動はなかった。

12月1日には春日宿舎の入居抽選が春日宿舎3号棟交流ホールで行われた。女子の倍率は昨年とほぼ変わらず6・30倍（同1・07倍）で、入居希望者数にも変動はなかった。春日宿舎ではここ数年、在学生の男子の募集はしていない。春日宿舎の一般単身の募集は情報メディア創成学類及び知識情報・図書館学類のみとなっている。

第19回TIEES

呉羽准教授が講演

環境教育のあり方を問う

第19回TIEESが、昨年12月16日に本学総合研究棟107で開かれた。TIEESとは、「筑波学際環境教育セミナー」の頭文字を取ったものである。代表の内山弘美氏が、本学及び周辺地域で行われている環境教育の実践、研究を結ぶことを目指して始めた研究会。

今回は、本学の呉羽正昭准教授（生環）が「グリーンツーリズムと大学の環境教育」について話し、学生と意見交換した。グリーンツーリズムとは、農村における観光全般を指す場合と農村地域で自然文化や人との交流を楽しむことを指す場合がある。現在は後者の意味で広く使われている。

呉羽教授は講演で、日本とヨーロッパのツーリズムの違いを述べた。日本では、観光ルートの立ち寄り地や遊園地などであり、農村空間は目的地としていない。一方、ヨーロッパは農村で長期滞在し、リラックスすることが目的だ。

環境教育では農村景観の重要性や農村が有する文化を理解するのが大切だ。そのためにも、農村は旅行の立ち寄り地や遊園地などと同種の観光地ではないことを強調していかなければならない。

参加した女子学生（地科1年）は「グリーンツーリズムについて整理出来、ためになった。都市観光を研究しているが、地域振興にも興味がある。これからも勉強していきたい」と話した。

本学職員に感謝状

多数の防犯活動が評価

「仕事の励みになる」

本学学生部学生生活課専門職員である土子昇さんにつくば中央警察署から感謝状が贈られた。防犯活動や交通安全活動などを通じ、警察活動に多大な貢献をしたとして、先月26日、多数の署員が見守る中、野々下敏署長から感謝状を受け取った。

同月27日には表彰を報告するため、山田博信学長を表敬。山田学長は土子さんに対し、功績への感謝とねぎらいの言葉を贈った。

土子さんは今回の受賞にあたり「これからの仕事の励みになる。これまで学生部が一体となって、防犯活動や交通安全活動などに取り組んできた。感謝状は学生部全体に贈られたものと思っています」と感想を述べた。

感謝状を贈られた土子さん

土子さんは、初任の部署が学生生活課だったが、その後広報調査課などを経験。本人の希望により、学生との接点が多い学生生活課に戻った。普段は学生の良き相談相手で、信頼も厚

不審者に注意

追跡男出現

本学女子学生が先月の早朝、自転車でペデストリアンデッキを走行していたところ、一ノ矢地区付近でスクーターに乗った男に道をふさがれ、肩を触られた。学生が悲鳴を上げると、男は逃走した。中央図書館付近で3、4人の男たちが騒いでおり、この女子学生が近くを通り過ぎると、そのうちの1人がスクーターで追いかけてきたという。

今年に入り春日地区で男が半身を露出していたという目撃情報が寄せられるなど、変質者の出没が増えている。深夜や早朝の外出は、控えた方が良いだろう。

学生論壇　社会への声

身近なもので無理なくエコ

「ペットボトルキャップを集めて途上国にワクチンを送ろう」という活動を知っているだけどのくらいいるだろうか。この活動は、簡単にできる社会貢献として首都圏を中心に数年前から広がりを見せている。その仕組みは、ペットボトルキャップを集めて、素材としてリサイクルする際、発生したお金をワクチン代として寄付する、というものだ。「一般的に」エコキャップ」などと呼ばれている。

学生団体CAPCAP298〃（キャップキャップツクバ）は、大学内で現在、計9つの回収箱を設置し、キャップの回収活動と分別活動を行っている。設置場所は各エリアに1つ以上、食堂や図書館、主要な棟の入口付近に置くようにしている。昨年の4月から本格的に集め始めて、約78000個、お金にして約6000円。ワクチン300本分のキャップを集めることが出来た。

この活動は私個人の海外での経験に端を発している。大学に入学した頃から途上国支援に興味があり、2年次の夏期休暇中に1週間弱、インドにボランティアに行った。そこで強く感じたのは充実感よりも自分のエゴだった。本当に途上国支援をしたいなら、膨大なお金と時間とエネルギーをかけて数日間だけボランティアをするより、もっと身近な支援を継続的に行うほうが意味があるのではないか、と考えて、新たな支援方法を探した。そこで見つけたのがこのペットボトルキャップの活動だった。たくさんの教職員の方々の協力を得て、昨年度は授業の延長や筑波大学社会貢献プロジェクトとして、今年度はTACTとして活動することができた。

さて、環境問題を語ろうとすると、どうしても車を持つな、ペットボトルを使うな、なぐせ、などの極論が持ち出される。しかし、現実的に考えて、車もペットボトルも環境に負荷がかかるが、生活に不可欠なものだ。そこで推奨されるのが「無理のないエコ」だと考える。ペットボトルはどうしても使ってしまうものだから、使った分キャップはきちんとリサイクルしてワクチンにしよう、というのが持論だ。同じように車は必要だけど出来るだけ環境に優しく、という考えが新車の販売台数にも表れていた。その積み重ねこそが環境問題を緩和するのではないだろうか。

ペットボトルキャップは環境問題や途上国支援について考えるきっかけをつくってくれる身近なツールだ。リサイクルが当たり前になるように、活動を推進していきたいと思う。

（CAPCAP298〃・兼岡聡美＝社学4年）

第37回バイオeカフェ
JAXAの矢野氏が講演

宇宙での生物実験を語る
会場では実験装置の展示も

第37回バイオeカフェ（大学院生命環境科学研究科・生物学類主催）が、昨年12月15日に総合交流会館多目的ホールで開催された。今回は「宇宙のライフサイエンス実験―植物実験と装置開発」と題し、宇宙航空研究開発機構（JAXA）宇宙環境利用センターの矢野幸子氏が講演した。学群生や教員ら約50人が参加し、同氏は宇宙の構造や自身の研究を語った。

矢野氏は生物学類を卒業し、本学大学院バイオシステム研究科（当時）を修了。現在は世界15カ国が参加する国際宇宙ステーション「きぼう」の生命環境実験研究者チームに所属、JAXAで実験装置の開発などに携わる。

今回のメインテーマは「植物は上へと成長するために重力を利用するが、無重力状態である宇宙ではどのように育つのか」であった。矢野氏は「無重力状態では上方に光源がないと植物は上には伸びず、土から根が飛び出しもするが、結果的には宇宙でも植物は育つことが確認出来た」と話した。また無重力状態でもメダカは産卵し稚魚が誕生した二方、鶏の卵からヒヨコは誕生しなかったことなどから、動物に関しては無重力への耐性に違いが見られたことが紹介された。

会場には植物の栽培用に矢野氏が実際に開発した実験装置も展示され、参加者は興味深げに眺めていた。

参加者の徳嶋賀彰さん（生物1年）は「矢野氏が植物の研究や装置の開発も行っているのが素晴らしい」と話した。矢野氏は「地球も宇宙の一部分で、宇宙実験をすることは、地球環境を守ることの重要性に気付くことでもある」と話した。

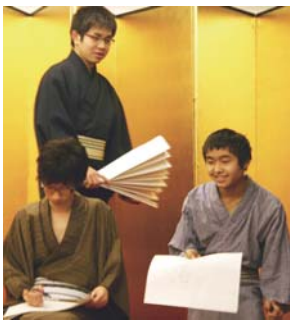
先月19日には、第38回バイオeカフェが「遺伝子から見た乳がん・大腸がん予後診断―身近になったDNAチップによる遺伝子診断」が開催された。また、2月16日には第39回バイオeカフェ「土は生きている―環境教育から見えるもの―」が開催予定である。

合同企業落語会
不景気を笑いで吹き飛ばす
学生を題材にした謎掛けも

就職活動をする学生を励ましまそうと「合同企業落語会」が昨年12月19日、落語研究会により催された。1C314教室に特設高座が作られ、落語や大喜利が行われた。つるが「つる」と呼ばれる由来やそろばんと勘定板を間違える噺など、5人の部員が約2時間にわたり日頃の成果を披露した。

この時期、他団体がクリスマスを意識したイベントを行う中、今回の落語会はひときわ目立っていた。合同企業説明会を連想させる会の名称には、昨今の不況に対して、落語ならではのメッセージが込められている。「不景気の波も、落語の話芸によってなんとか吹き飛ばしたい。就職活動をする学生に笑っていただき、元気になってもらいたい」と会長の小玉祥さん（国総2年）は語る。

部員一同による大喜利では、観客から出されたお題で、謎掛けをおこなった。参加した仲川公二郎さん（比文3年）は「僕たち若者にもなじみのある話で、おもしろい。特に学生をネタにしたものには思わず笑ってしまった」と笑顔で語った。


大喜利で観客を沸かす部員たち

筑波小劇場公演
日常生活描く
舞台装置も工夫

劇団筑波小劇場12月公演「云々」が昨年12月26、27日3A304教室で開かれた。2日間で学生、一般客ら93人が訪れた。

「云々」は大学生の朱美らが日々の生活や人間関係などを通して、生と死、自分の気持ちを偽ってしまうことを考えていく創作劇。スクリーンなども駆使された工夫あふれる舞台や、私たちの日常を鋭く切り取った演出、そして迫真の演技に、観客は引き込まれた。劇が終わると、会場は大きな拍手に包まれた。

演出を務めた田中至さん（芸専4年）は、「生や死について考える人間の愛おしさを感じてもらえたら」と公演に込めた思いを語った。来場者でOBの飯窪聖司さんは、「演出が良く、いろいろ考えさせられる劇だった」と感想を述べた。

岸英光セミナー
一歩踏み出す方法語る
実践で新たな発見

学生団体「アウトレイジャス」が主催するつくば（T-ACT）の企画「わかる・伝わるコミュニケーション―岸英光コーチによる実践トレーニング―」が、昨年12月9日に3A202教室で開催された。講師にビジネスコーチ・エグゼクティブコーチの岸英光氏を招き、学生や教職員ら約100人が参加した。

岸氏は、コミュニケーションのあり方や、やりたい事や必要な条件が全て整っていてもそれを実行に移すことが出来ない原因などについて講演し、参加者は実践も交えながら理解を深めた。

岸氏は、現代人の多くがなかなか思うような行動や能力、結果を出せない理由は「パラダイム（考え方の枠組み）にあると説明。「成功出来ない人は『自分には能力がない』というパラダイムが無意識に作っている。多くの人は大概のことをこなす能力を持っているが、パラダイムが足かせとなり行動が制限されると話した。

講演の後半には、「クリアリング」という、初対面の人と二人一組で向かい合い、一人が自分に起きていることを端から口に出す一方で、もう一人が相手の聴き役に徹するコミュニケーション法の実践が行われた。参加者からは「クリアリングの後は、緊張や疲れのあるなしに関わらず、しっかりと物事がとらえられる」と驚きの声が上がった。主催代表の霜鐵安文さん（数学前期2年）は「筑波大を世界一の大学にしたいと考え本セミナーを企画した。本学生の潜在能力が引き出されるきっかけになれば」と話した。

学生を前に話す西川副学長

全代会構成員と副学長等との懇談会
学生宿舎における問題共有
居住者同士のつながり密に

全学学類・専門学群代表者会議（全代会）の活動を副学長らに報告し、意見交換を行う「全代会構成員と副学長等との懇談会」が昨年12月10日に第1エリア大食堂で開かれた。懇談会には大学側から西川潔副学長（学生担当）、清水一彦副学長（教育担当）をはじめ、学群長や学類長など約60人の教職員と約60人の学生が参加した。

まず全代会の学生が平成21年度の活動中間報告を行った後、クラス代表者会議との周辺組織との枠組みや学生宿舎におけるコミュニティに関する提案が提示され、それに対する質疑応答がされた。

宿舎コミュニティに関する提案では、全代会側から「同一階であっても隣人の名前知らない学生が多い。そのため、学生同士で注意しあうことがほとんどなく、居住者のマナー問題が改善されない。宿舎内にコミュニティを作り、学生のつながりを密にする必要がある」という提案が出された。これに対し、西川副学長が「コミュニティ作りには困難が伴うと思うが、どうやって作るつもりなのか」と質問した。提案者の全代会生活環境委員会委員長の藤井太郎さん（社学3年）は「いきなり宿舎全体で組織するのは難しい。まずは各号棟の同じ階から作っていきたい」と答えた。

また、参加者から「留学生に対する宿舎のマナーについての説明が不足しているのではないか」という質問があり、それに対して西川副学長は「今後検討しなければならない」と答えた。

今回の懇談会について西川副学長は「今回話し合われたことは大学としても緊急の課題であり、今後はこれらの問題を解決するためのきっかけ作りを学生側と協力して進めていきたい」と語った。また、全代会議長の清川朝日さん（知識3年）は「大学の上層部にはなかなか伝わらない普段の全代会の活動を伝えることが出来た。今回話し合われた提案について、今後は学生と教職員と話を詰めて、より具体的な話にしていきたい」と語った。

あくまで探言 tanbō
書道部
書によって広がる世界

墨汁の匂いが漂う作業室。真剣な眼差しで筆を走らせる。一字一字バランスをとりながら、全体の構成に気を配る。濃淡の具合も大切だ。文化部の定番ともいえる書道部は本学でも活動している。高校から書道を続けている比屋定実季さん（教育1年）は「作業室がなく、芸術祭の学生の作品を見ることが出来る」と部の印象を語る。

普段は雙峰祭や新歓での書展に向け作品を制作したり、古典を参考にしながら書の練習をする。「好きな時に活動出来るところが良い」と部員の津留寛さん（心理2年）。書きたい作品を気が済むまで練習出来るという自由な気風が部員には好評だ。

そんな同部では作風も人それぞれ。過去には甲骨文字や梵字、活字風の文字など、作者の個性が際立つ作品もあった。また、ある部員の提案で共同作品を手掛けたことも。

昨年の雙峰祭の書展では、作品を売ってほしいという要望を受けた。手続きの問題などがあり、販売しなかったが、今満さんは「自分の作品が他人のお眼鏡にかなったということで、うれしかった」と振り返る。今後、作品の販売を行うかどうか検討するが、部内には「時間をかけて書き上げた作品だけに手放したくない」との意見が多い。

同部では作業室を共有している芸術系の大学院生や学群生が、作業の合間に部員の指導に当たる。表現や細かい構成などについて、手本を示しながら教えてくれるという。指導に当たる高橋智紀さん（芸術前期2年）は「同じ学生なので、気負わず指導している。将来教員になることも考えているので、自分にとっても勉強になる」と語る。

部員には書道経験者も多いが、字が下手な人も歓迎だという。そもそも筆は鉛筆とは違い、筆圧の加減が難しい。慣れていなければ、上手く書けないのが普通だという。ウチコミやハネなど基本的な技術を練習すれば、それなりの作品が書ける。実際、筆を持ったことすらない留学生が2時間ほどで、〝だるま〟だったものを習字の形にすることが出来た。

「書くことで自分と向き合い、自分の世界をつくれる」（今満さん）という書道。次の書展に向けて皆、黙々と筆を走らせる。（本紙・宇治田輝之II国際総合学類）

がん医療シンポジウム
柳田邦男氏が講演

筑波大学附属病院総合がん診療センター主催の公開シンポジウム「がん医療従事者へのメッセージ」が2月21日、つくば国際会議場中ホール200で開かれる。

ノンフィクション作家の柳田邦男氏が「進むがん医療と」「2・5人称の視点」と題して講演を行う。また、赤座英之同センター部長、兵頭一之介教授（疾医）を座長に「明日世界がかわるとも、ともにリンゴの樹を植える」と題したパネルディスカッションも開催。

午後2時―4時30分。参加は無料だが、事前申し込みが必要。定員になり次第、応募を締め切る。問い合わせ＝ccc@un.tsukuba.ac.jp（本学附属病院総合がん診療センター）

エコサイクル
不要な家具を新入生に

「3R＋1EcocYcle09―10」が卒業、引っ越しシーズンに合わせ家具、家電を募集する。卒業生や教員から不要になった家具、家電を引き取り、新入生に提供する。対象物品は冷蔵庫、こたつ、カラーボックスなどの家具、家電。また、木ブロック、突っ張り棒、食器などの生活雑貨。汚れや破損があるものは引き取れない場合もある。

回収は平砂・一ノ矢の共用棟に持ち込むか、訪問回収。ただし、訪問回収はホームページからの事前申し込みが必要。回収時は2月13日、3月6、13、20、21、22、26、27、28、29日の午前9時―午後4時。ホームページ＝http://www.ecocycle-tsukuba.net/

Who's Who?
科学技術予算削減反対の署名を提出
服部竜己さん（自然4年）上口長昭さん（同）

達成感に微笑む服部さん（左）と上口さん

科学への熱意を原動力に
学生としての「声」届ける

「思っているだけでなく声を形にして届けることで、少しでも伝えようとすることが大切」。そう話す服部竜己さん（自然4年）の言葉に上口長昭さん（同）がうなずく。2人は昨年12月、事業仕分けによる科学技術予算削減の見直しを求める署名活動を行い、民主党と文部科学省に提出した。

2人は同じ物理学専攻で、現在、服部さんは物性物理という分野で素粒子を、上口さんは原子力、原子核の分野で基礎研究を行っている。

「物事の後ろ側が見えるようで面白い」「なぜ？」と問うほどに下の階層が見えてきて興味深い」と目を輝かせて話すように、2人は科学への熱意に溢れている。

共に科学に没頭し研究を続けてきた2人。今回の科学技術予算削減に、「まさに自分の未来に直結してくることだし、日本の科学、ひいては国そのものの衰退も招くと感じた」と声をそろえる。

そんな折、上口さんは東大生の友人から予算削減に反対する署名活動などの取り組みをするという話を聞く。本学でも学生として立ち上がろうという意識が芽生え、すぐに服部さんに連絡した。

2人は理系の学類生10人の協力を得て、12月中に3日間の署名活動を行った。昼休みにキャンパス内で通り行く人々に署名を呼び掛け、3日間で1000人を超える署名を集めた。

署名活動は、理科系の学生を中心に多くの共感を呼んだ。「政治に関心がなくても、今回のニュースについては良くないと感じる人が多かった」と服部さん。多くの署名が集まった背景には、2人の行動力はもちろん、学生の持つ危機感の存在も大きいようだ。

しかし「科学技術予算を他の事業に使うべきでは」という反対意見に出会った時など、苦悩もあった。同時に政治への意識も高まったという。

「科学は政治に直結しないかもしれないが、政治は科学と直結する」と上口さんは熱く語る。このような強い思いも、活動の成功の要になった。

こうして集まった署名1266人分を小沢一郎民主党幹事長に提出するため、12月18日に民主党県6区支部長の大泉博子衆院議員に手渡した。また、川端達夫文科相あてに1188人分を郵送した。大泉議員に会ったことを上口さんは「政治家としての気迫に圧倒された。霧囲気に飲まれるようなインパクトがあり、冷や汗も出た」とその強烈な印象を振り返る。大泉議員の「大学生としてのプライドを持つべき」という言葉に感銘を受けたという。署名は快く受け取ってもらえ、後日小沢幹事長に届けられた。

服部さんは今回の活動を「多くの壁を乗り越え形に出来たという達成感が大きい。どれほど反映されるかわからないが、声を届けたことが重要だと思う」と振り返る。

今後、服部さんは研究者を目指す。「厳しい世界だが、科学に携わっていきたい」と意気込みを語る。一方、上口さんは自らの知識や経験を社会や人々に直接還元していきたいという思いから、医学方面の院に進み、放射線治療など治療法の開発に携わるという。科学への熱い想いを胸に、2人の挑戦は続く。（本紙・堀木陽子＝人文学類）

うちわ話
☆引退記者からひとこと☆

アイデアが生まれる場所　風呂30％　通学路10％　教室10％　会議室――50％（T）フリ○クの某CMとは違い、会議で出たアイデアからはじまる。「ネタになるかも」とメモした授業中の雑談が特集に繋がったことも。大学新聞こそ「SHARPEN SME UP！」私を磨いてくれた場所です。（まつ）

5人。2年前2月号を発行した時の全メンバー数であり、先月号で代替わりとなった3年生の数でもある。当時は「つぶれるかもしれない」という危機的状況で、今のようになるとは全く想像つかなかったなあ……ここまで来れたのも顧問の先生や先輩、同学年のメンバー、そして後輩の支えがあってこそ。本当に、感謝の思いでいっぱいです。（智の探求者）

新聞部の門戸を叩いたのは3年の春、遅咲きの部活デビュー。退廃した大学生活に刺激が欲しいとの思いで入った新聞部はいろんな人に出会えた。一番刺激的だったのは部内の女社会。冷静沈着な女編集長や全力サポートの後輩女子。女性の発言力は更く男性より輝いていた。悩殺されていただけ、かも。文理も考え方も違う多彩なキャラクターの集団。多くを学ばせてもらい、心底感謝している。刺激と激動の1年間だった。（すーぱーじゅにあ）

初めて編集室の扉をくぐってから早2年半。編集期間は晩から朝まで編集室にこもり、普段はアポ取り、取材、原稿執筆の毎日。他団体にも所属し、自分の許容量を超えた話をしていたにも関わらず、最後まで続けられたのは先生や広報室の方々、そして何より部員のみんなのおかげ。ものすごく勉強になったし、楽しかった。送別会でもらった「おっぱいマウスパッド」おっぱいが擦り切れるまで愛用します。（ティッシュ）

「明日新宿のJICAで緒方貞子さんの写真撮ってきて」。初仕事で先輩から5W1Hを携帯メールで習った。1面の写真担当を勝手に自任。いつもカメラを持って人より前に出ることを考えていた。チェコへの留学で編集長を早退し、海外特派員の役職を頂いた。戻ったまた部員に復帰し、好きな仕事だけやった。全く、筑波大学新聞の名前を好き放題使い倒した3年間だった。（しの）

次号は
4月7日(水)
発行予定です

筑波自然図鑑
◇カルガモ◇
撮影地＝つくば植物園

本州以南の平野部から山地にかけての広い範囲に生息し、主に水辺で見ることができる。茶褐色の体は尾に近づくほど濃く、黒いくちばしは先端部が黄色くなっている。寒い冬場でも水上を漂い、藻や草を食べていることが多い。

学内の池でも観察することができ、池に氷が張ってしまった寒い冬の朝などほ氷上を歩く愛嬌のある姿を見せてくれる。

（写真・文＝茂木貴弘、エシス2年、野生動物研究会）

催事

展覧会

◆COLOR―FULL
芸専2年の学生有志12名による展覧会。絵画や立体作品などの研究発表と11点のインスタレーション作品の展示。
2月3―12日の午前9時―午後7時まで。場所は2学食堂、3A棟屋外など。入場無料。問い合わせ＝geijutsu_2_3@yahoo.co.jp

交流会

◆変活2010―異学類交流会―変化のための活動（変活）
観を見つけることが目的。
第1回変活は2月4日に1E203で開催。午後6時―7時半まで。ホームページ＝https://www.t-act.tsukuba.ac.jp/tact/project/show/89

筑波大学出版会
好評発売中！

企業城下町の都市計画
～野田・倉敷・日立の企業戦略～
中野茂夫 著

企業城下町とは「あたかも近世城下町の領主のように大企業が都市に君臨している様子」から用いられるが、そこでは生産関連施設を優先した都市づくりが行われた。このアンバランスさこそ、日本の近代都市計画の特徴であった。

本書は3つの企業城下町での企業戦略を読み解きながら、都市形成の歴史を探っている。都市計画史の研究書として関連学会で高く評価されるとともに、平易な文章と豊富な図版等を駆使した動的な地域史として、一般からも好評である。著者は、本学で博士号を取得し、現在、日本学術振興会特別研究員。税込5460円。

大学会館書籍部ベストセラー

1	就職四季報　総合版　2011年版	東洋経済新報社
2	朝日キーワード　2011	朝日新聞社
3	イノセント・ゲリラの祝祭（下）	海堂尊/宝島社
4	絶対内定　2011	ダイヤモンド社
5	思考の整理学	外山滋比古/筑摩書房
6	イノセント・ゲリラの祝祭（上）	海堂尊/宝島社
7	就活のバカヤロー	石渡嶺司/光文社
8	最新最強SPIクリア問題集	成美堂出版
9	理系のための英語「キー構文」46	原田豊太郎/講談社
10	確率に強くなる「偶然」にひそむ数学法則	ニュートンプレス

今月の1位は東洋経済新報社の「就職四季報2011年版」。2位には「朝日キーワード2011」がくい、本格的な就職活動の時期が到来したことを感じさせる。3位と6位には厚生労働省を舞台に医療問題を鋭く描く小説、「イノセントゲリラの祝祭」が入った。

丸善出版物15％オフ、理工系専門洋書20％オフ、マセマ出版社の本15％オフフェアを2月末まで開催。